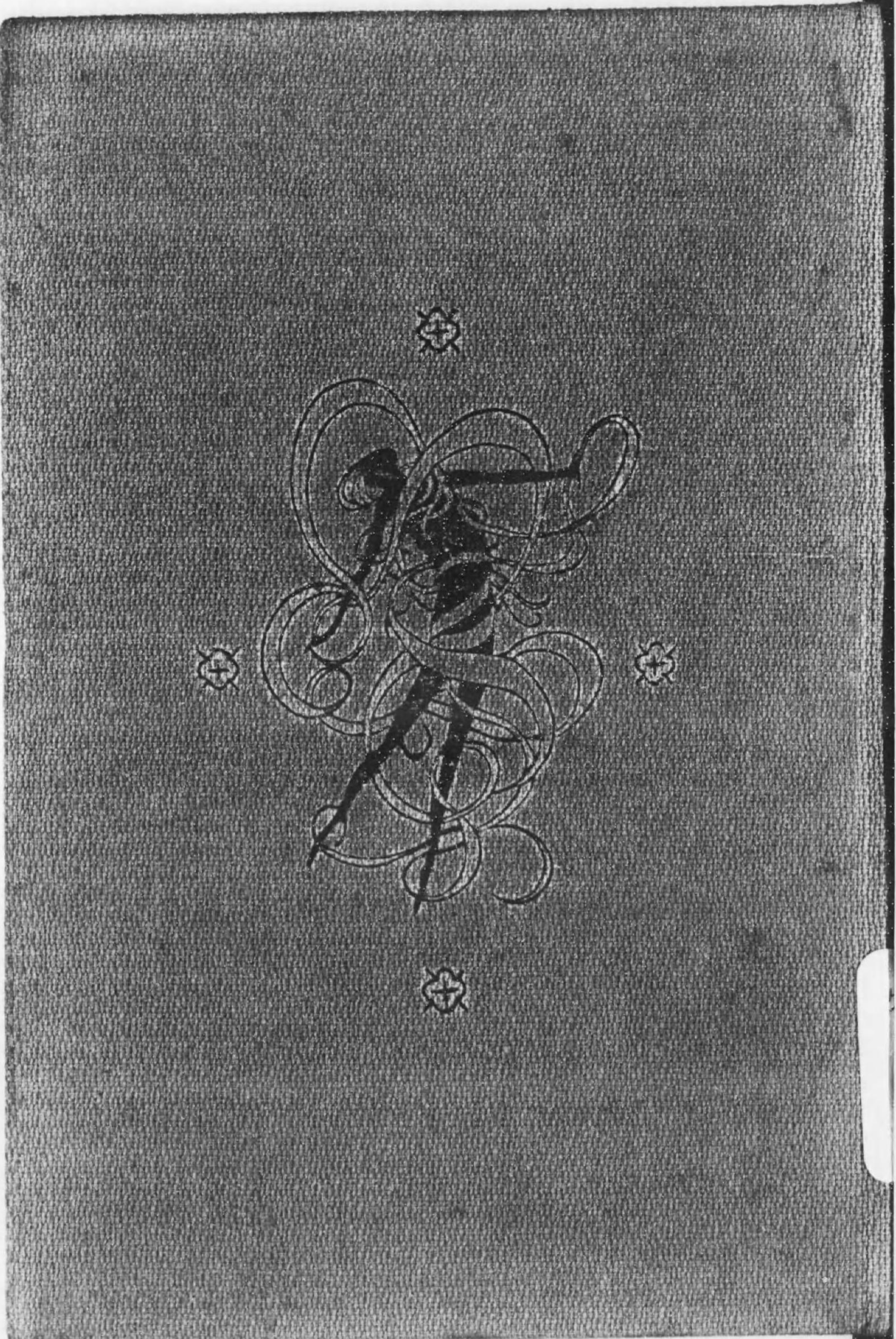
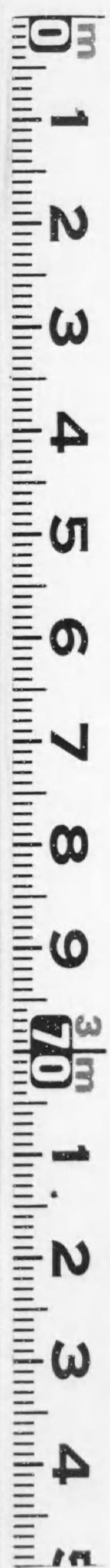
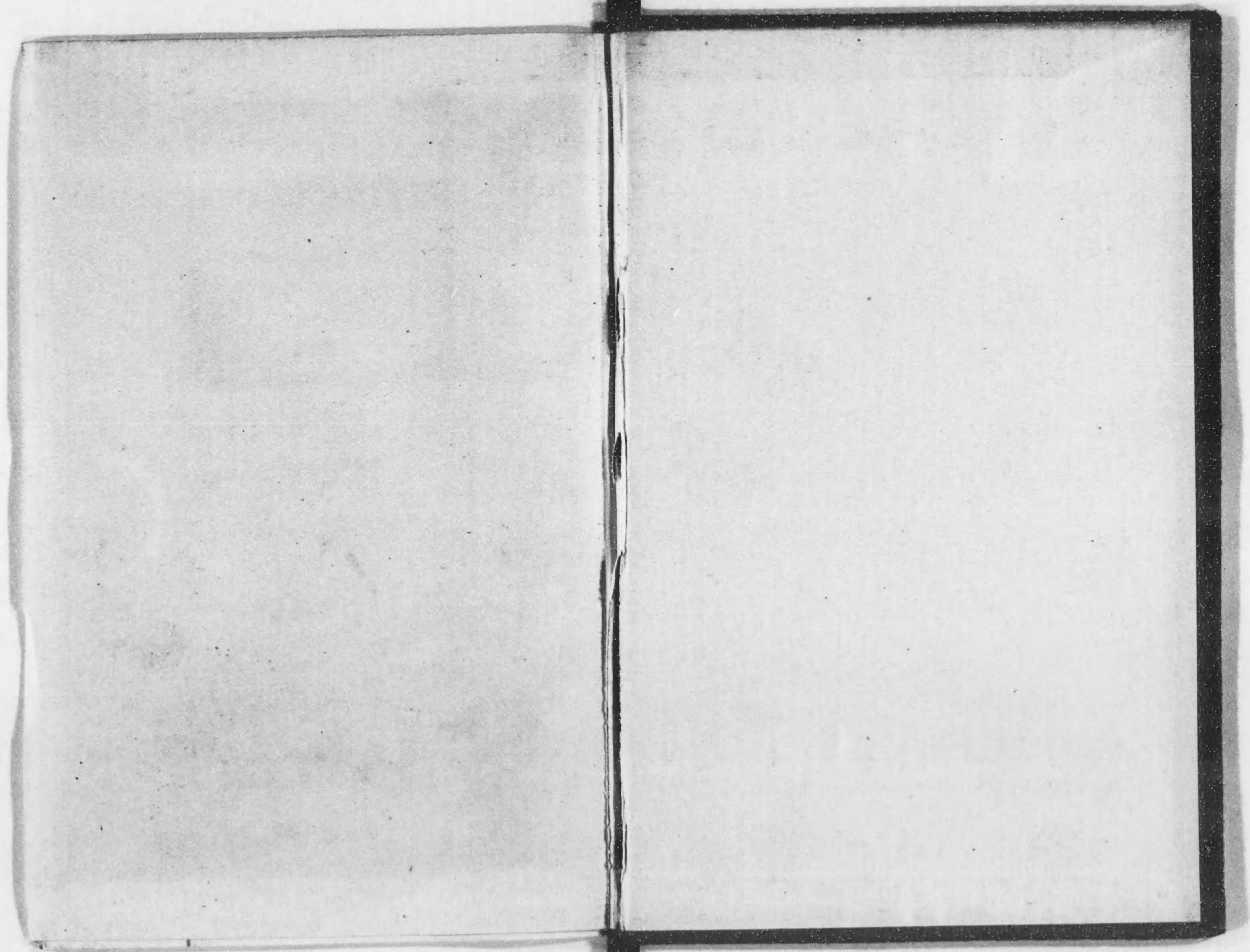


始





特110  
942



集作傑畫映藝文界世

3

久小  
椿 米ナ  
正ユ  
雄マ  
編作

姫

社本日藝文

14.6.4  
内交

繪 口

ア フ  
ラ ラ  
ン シ  
ナ チ  
イ エ  
ス  
モ カ  
グ ベ  
ア ル  
主 チ  
演 ニ  
の ー  
椿 の  
姫 椿  
四 姫  
葉 一  
葉 葉

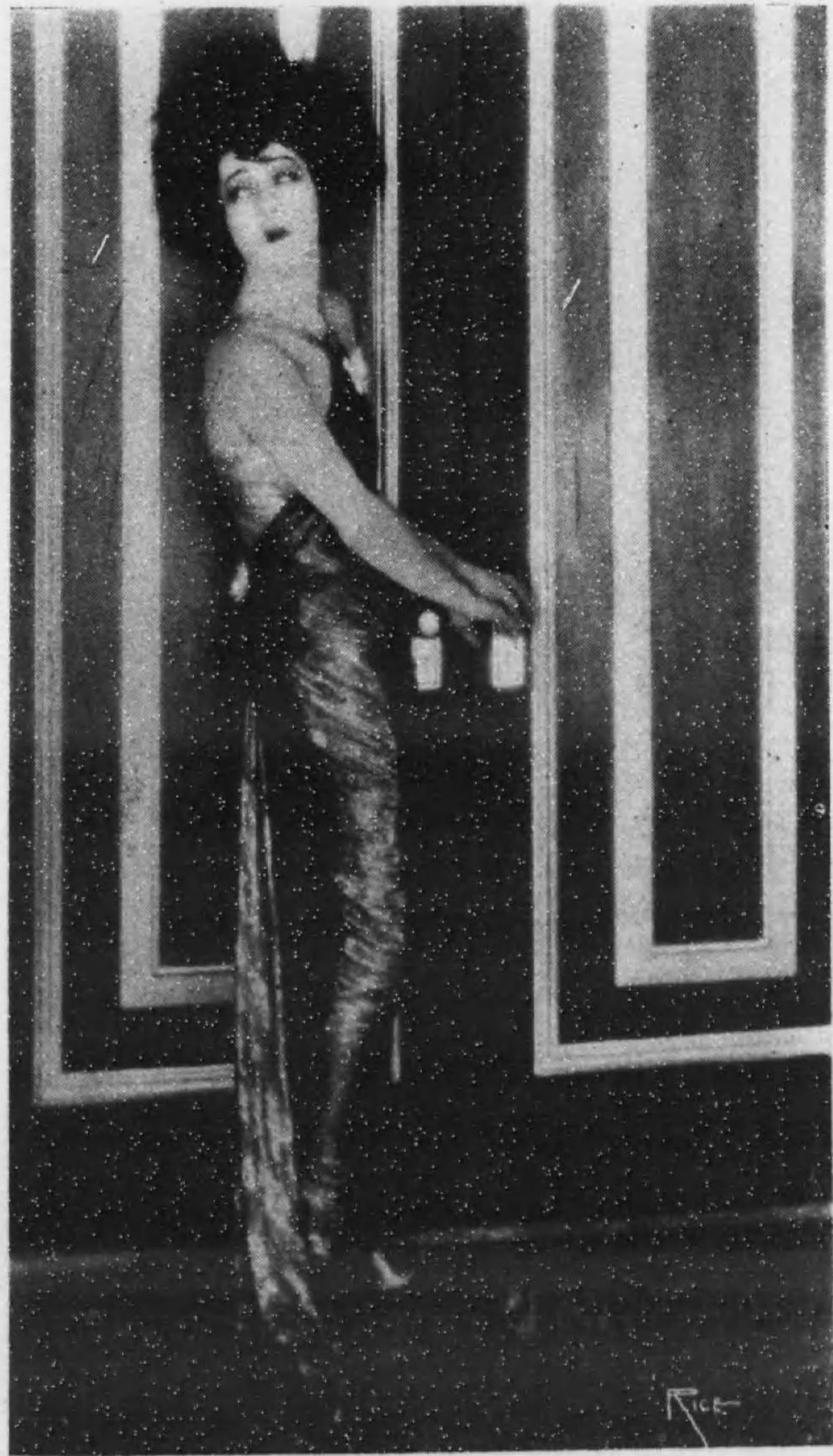
...

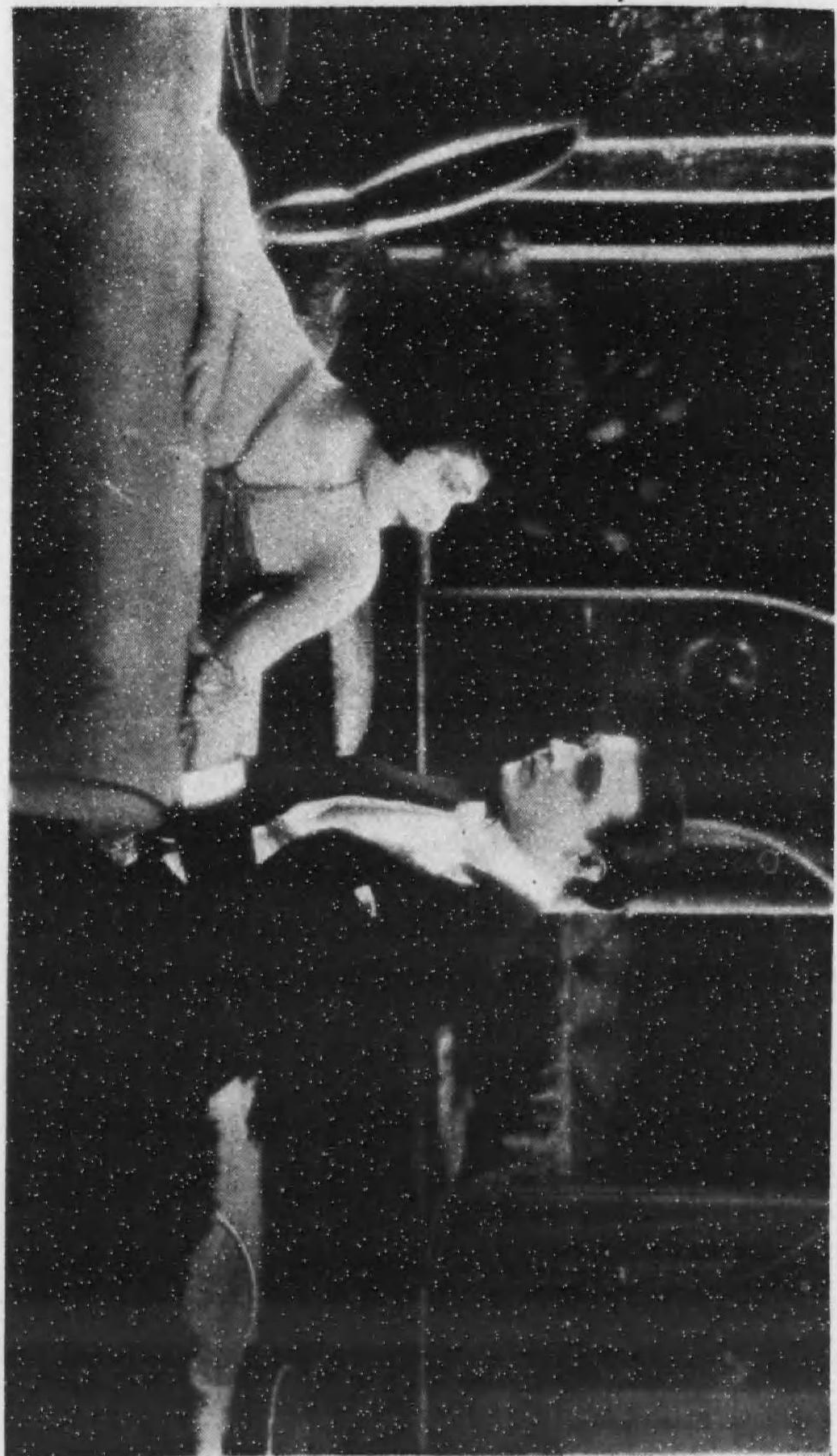


目錄

一	二
三	四
五	六
七	八
九	十
十一	十二
十三	十四
十五	十六
十七	十八
十九	二十
二十一	二十二
二十三	二十四
二十五	二十六
二十七	二十八
二十九	三十
三十一	三十二
三十三	三十四
三十五	三十六
三十七	三十八
三十九	四十
四十一	四十二
四十三	四十四
四十五	四十六
四十七	四十八
四十九	五十
五十一	五十二
五十三	五十四
五十五	五十六
五十七	五十八
五十九	六十
六十一	六十二
六十三	六十四
六十五	六十六
六十七	六十八
六十九	七十
七十一	七十二
七十三	七十四
七十五	七十六
七十七	七十八
七十九	八十
八十一	八十二
八十三	八十四
八十五	八十六
八十七	八十八
八十九	九十
九十一	九十二
九十三	九十四
九十五	九十六
九十七	九十八
九十九	一百









### 世界文藝映畫傑作集出版に就いて

文藝映畫の時代は、遂に幕を閉じた。文藝映畫の華々しい時代は、「キーン」の出現によつて今春その輝かしい曙光を我々の頭上に投げた。眞摯にして純情を持つファン諸君は、従來のやうな俗悪低級な映畫には一顧をも與へなくなつた。映畫作品に、眞實な人生的意義と恍惚たる藝術的陶醉とを求めてやまないので、現代の代表的ファンである。我國の映畫業者が、早くも此の趨勢を察し、續々世界的文藝映畫の上映に志しつつあるは、吾人の深く欣懷に堪へないところである。茲に小社も、微力ながら、現代民衆藝術の最上の榮冠をになふところの映畫藝術

の進展運動に參與し、聊かたりとも我國文化の向上に貢献しようとする自負心を以て、此度『世界文藝映畫傑作集』の連續出版を敢行した。小説戯曲に拘らず、苟くも世界的文藝傑作と稱せらるゝものであつて、同時に映畫として傑作の名を歌はるゝものは、悉く本集に網羅されるのである。且つ、本文の外に解説として、原作と映畫との比較研究、及び同一原作にして多種の映畫を有するものは、それらの映畫、乃至俳優の比較研究等を細述し、以てファン諸君の映畫愛好心と研究心を充分に満足せしむることを期する點、本集の一大特徴といはなければならぬ。大方の愛讀を俟つ次第である。

大正十四年四月

椿

姫

辯護士になつたばかりの青年アルマン・ヂュバルは、自分の田舎から久しぶりで巴里に歸つて來た。彼れはたつた一人で借りてゐる廣い室の窓際に椅子を寄せ、暮れ行く四邊の景色にじつと見入つてゐた。太陽はもう間もなく沈まうとしてゐる。西の空は青と金色とに、美しく彩られてゐた。ほんとうに靜かな春の夕暮れであつた。彼れの耳に時々聞えて來るものは、街を行く馬車の轍の軋る音ばかりで、繁華な巴里の町中にあるのだとは思はれないほど、四邊はひっそりとしてゐた。

庭に廣い花園があつた。たくさん草花が美しく咲き亂れてゐる。酔はずやうな高い香が、四邊に流れてゐた。樹々は若葉をふき始めてゐた。凡てのものが生々と甦つて來たやうに思はれた。しかし、若いアルマンの心だけは暗く沈んでゐた。彼れは靜かな室内に、じつとゐたまま寂しさを覺えた。どうしても華やかな明るさの中に、ある限りの享樂を求めなければ、もう生きて行けないやうな氣がした。彼れは

椅子を投げ出して、狂氣のやうに室から飛び出して行つた。そして、友人のガストンを誘つて、ある劇場へやつて來た。

明るい劇場の空氣は、いくぶんアルマンの氣持を晴々とさした。幕合の時間が來た時、彼れはガストンと一緒に外の廊下へ出て行つて見た。虚榮の限りをつくしたやうに、美しく着飾つた貴婦人や紳士たちが、競ふやうに歩いてゐる。アルマンも同じやうな氣持ちに誘はれて、彼等に交つて廊下を歩いた。薄い面紗ベールで顔を覆ふてゐる、丈のすらりとした美しい婦人に出會つた。ガストンはその婦人を知つてゐたと見えて、親しさうに挨拶をした。ちらりと見た婦人の顔は、不思議なほどアルマンの心を惹きつけたので、彼れは婦人の名を聞かずにゐられなかつた。

『あれはマルグリット・ゴオチエ、椿姫だよ』

アルマンは吃驚して、婦人の後姿にじつと見入つた。たしかにマルグリットに違ひないことが判つた。

彼れは三年前、劇場で度々會つた時の彼女の姿を想ひ浮べた。彼女の白い手には、

いつも綺麗な椿の花が持たれてゐた。月の二十五日までは、椿の花は白く、後の五日は赤に變つてゐた。このことがいつか巴里中の評判となつて、人々は彼女を椿姫と呼ぶやうになつたのである。愛らしい面長の顔に、美しく輝いてゐる黒い瞳、濃い長い眉、薔薇のやうに紅い唇、容貌の凡てに、美しい情熱が燃えてゐるやうであつた。波うつてゐる漆のやうに黒い髪の毛を、額から二つの大束に分けて、頭の後に撫でつけてゐた。髪の間からは愛らしい耳朶が見えて、耳朶にはダイヤが輝いてゐた。

美しい容貌や、氣高い姿には、今も少しの變りはなかつたけれど、なぜか暗い影が彼女を包んでゐるやうであつた。もう過去のやうな晴々しさは彼女の中に見られないやうな氣がした。

アルマンは、突然ガストンに背を叩かれて、初めて自分に氣づいたやうに向き直つた。

『マルグリットはすつかり寢れてしまつたんで、僕は見違へてしまつたんだよ。』と彼れはなんでもないやうに言つた。

『あの女の病氣はよくなるまいんだよ、可哀想にもう長いことはあるまい。』  
かうガストンに言はれると、アルマンはじつと落ちついてゐられないほど、激しい  
胸さわぎを覚え始めた。

アルマンが初めて彼女を見たのは、もう三年も前で、ブウルス通りの歩いているた  
時のことであつた。ある雑貨店の前に止つた馬車の中から、偶然、天使のやうに美  
しい女が現はれた時、アルマンは心を惹かれずにはゐられなかつた。彼れは店頭で釘づ  
けにされたやうに立つて、女が店から出て来るのを待つてゐた。やがて女は出て来た。  
飾りのついたモスリンの着物を着て、花の刺繡なゐさじりがしてある印度織のシヨオルを掛け、  
伊太利製の麥藁帽子を冠つてゐる姿は美しく上品で、どうしても貴族の婦人に見えた。  
女はまた馬車に乗つて、いづこかへ行つてしまつた。この時からアルマンは、彼女を  
忘れることが出来なくなつたのである。美しい幻は絶えず彼れを苦めた。彼れはもう  
一度彼女を見たいと思つて、巴里の町中を毎日のやうに探して歩いた。それから幾日  
か過ぎて、ある日友人のエルネストと一緒に劇場へ行つた時、もう二度と會へないと

思つてゐた女を、偶然ボックスの中に見出したのであつた。彼れは夢ではないかと胸  
を躍らした。

彼女はエルネストを知つてゐたと見えて、オペラグラスを二人の方に向けて、からか  
ふやうに笑ひながら手招きをした。

アルマンは自分のこがれてゐる女が、意外にもエルネストの知り合ひであつたのか  
と思ふと、羨ましく思はずにゐられなかつた。

『君は幸福だね、あんな婦人を知つてゐるなんて。』と、つい彼れは口に出してしまつ  
た。

『君はあの女に思召があるのかい、ぢや僕が紹介しよう、一緒に來たまへ。』  
アルマンは思はず顔を紅らめてしまつた。

實際彼女に戀をしてゐるのかどうか、自分でもはつきり分らなかつた。たゞしきり  
に彼女に會つて見たかつたのである。しかし、女から許しを得ないうちは、會ふのは  
どうしても嫌だと強情を張つたので、友だちは仕方がなしに、彼女の所へ訊きに行つ

た。

『お待ちしてゐつてさ。』

戻つて来た友だちはかう言つて、廊下の方へ出て行くので、彼れは變に思ひながらついて行つて見ると、賣店へ入つた。そして葡萄の砂糖漬を一斤買ひ込んだ。

『あの女に頼まれたんだよ。ボン／＼より外の菓子ほかは喰べないつていふのは有名なんだ。』と、友だちは笑ひながら言つた。

そこを出てから友だちは耳に口を寄せて、『君、あの女がどんな種類の女だか知つてゐるだらうね、公爵夫人だなどと思つちやいけないよ。あれは賣春婦だよ。だから遠慮なく思つたことをどし／＼言ひたまへ』と、注意するやうに言つた。

アルマンは『よし／＼。』と呷りながら、彼れの後からついて行つたが、若し彼女がそんな女であるとするなら、自分の戀が冷めてしまふのも、もう間もないことだと考へてゐた。

彼等がボックスに入つた時、マルグリットは何か面白さうにきやツ／＼と笑つてゐ

たが、まつ先さきに友だちの手からボン／＼を取り上げた。それからアルマンの方に顔を向け、一寸頭を下けて、いつまでも彼れの顔を視詰めてゐるので、彼れは俯目ふしめになつて、ほつと顔を紅らめてしまつた。

マルグリットは傍にゐたもう一人の女になにか耳打ちをして、二人は同時にふき出した。

アルマンは堪へがたい侮蔑を感じて、口が利けなくなつてしまつたほど、彼れの胸は憤怒に燃えた。

マルグリットは彼に少しも頓着せずに、ボン／＼を喰べ始めた。

『マルグリット、アルマン君は君に壓服されて口が利けないんぢやないか、僕は君に紹介の許しまで求めておいた筈だ』と、友だちのエルネストは見かねるやうに言つた。『あなたが退屈だからこの方を連れていらつしやつたんでせう。こゝへ來るのが怖いもんだからそんなことをして時間を延ばしたんでせうよ。』

彼女は毎日自分が他人からいぢめられてゐる復讐をするやうに言つた。

アルマンはもう一時も、その場にゐたたまらなかつた。

『もう二度とお邪魔はいたしません』と、彼は大声で嗚鳴つて、荒々しくそこから出て行つてしまつた。ボックスの中でドット笑ふ聲がした。

自分の座席に戻つて來ると、開演にもう間がなかつた。エルネストもすぐ後から歸つて來て、隣席に着いた。

『君、マルグリットは笑つて、あんな變な人は見たことがないと言つてゐたよ。だが君は脳鐵砲を食はされたんではないよ。あんな奴は犬と同じで禮儀も作法も知らないんだからね。』と、彼れは慰めるやうに言つた。

『なあに、もう二度とあの女には會はないから、』と、アルマンは努めて無頓着を装ふた。

しかし、彼れはどうしてもマルグリットを忘れることが出来なかつたのである。幕が開いても、舞臺で何をやつてゐるのか分らなかつたほど、彼女のボックスにばかり氣を奪はれてゐた。また別に新しい想ひが、彼れの胸に湧いて來た。いまあつた一

切のことは凡て打ち消して、自分の全財産を擲つても、彼女を自分のものだけにしたいと思つた。

芝居がまだはねないうちに、マルグリットは伴れの女と一緒に立ち上つた。彼女がボックスから出て行つたのに氣付くと、アルマンも周章で立ち上つた。階段の下に姿を隠して玄關口の方を見ると、二人の男が彼女たちを迎へに來てゐた。

『カフェ・アングレエの方へ馬車を廻はしておくれ、わたしたちは歩いて行くから』と、御者に言ひ付けてゐるのが、アルマンの耳に入つたので、彼れは暫く經つてから劇場を出て、彼等が歩いて行つた道をぶら／＼と歩いて行つた。

カフェ・アングレエの前まで來ると、マルグリットが二階の窓の欄干にもたれて、手に持つた椿の花をむしつてゐる姿が、アルマンの眼に映つた。一人の男が彼女に寄りかゝるやうにして、何かしきりにさゝやいてゐるやうであつた。彼女の顔は青白く悲しげに見えて、劇場で見た時よりは、一層美しく氣高かつた。忌はしい生活をしてゐる女とは、どうしてもアルマンには思へなかつた。

彼れはアングレエと向き合つてゐる、メエゾン・ドウルといふ小料理屋の二階へ上つて、アングレエの窓を眼の疲れるほど見守つてゐた。

夜中の一時頃になつて、マルグリットは三人伴れで馬車に乗つたので、アルマンは馬車の跡をつけて行つた。馬車はアンタン街九番地で止まつた。マルグリットは獨りで家に入つて行つた。一人で入つたといふことは、いふまでもなく偶然に違ひなかつたけれど、その偶然が、彼にはたまらなく嬉しかつた。

斯んなことがあつて後、彼れは劇場や、シャンゼリゼで、マルグリットに度々會ふようになつた。それから二週間ばかりの後、彼女は肺病になつて、生命も危いくらゐだといふ話を友だちから聞いた時、彼女が病氣であることが、却て彼には嬉しく感じられた。彼れは毎日のやうに花束を持つて、彼女の家を見舞つた。が、名刺一枚添へたことはなかつた。マルグリットはその後大分快くなつて、保養のためにバゲエヤの温泉場へ行つてしまつた。

アルマンもかなり長い旅に出かけた。さうして時が経つまに、彼れの心深く刻みつ

けられた彼女の印象は、だん／＼薄らいで行つた。

けれども、彼れはマルグリットを忘れたのではなかつた。時が彼女から隔てさしておいただけのことであつた。

いま廊下でマルグリットの姿を見た時、彼れの胸には、熱い戀の焰が燃えさかつたのである。

## 二

アルマンはもう一時も、廊下を歩いたりしてゐられなくなつた。彼れは大急ぎで自分の坐席に戻ると、マルグリットはどこにゐるのか、夢中になつて場内を探した。

彼女は階下のボックスに、たつた一人である。先刻彼れが廊下で見た時よりは、變つた容子がよく分つた。苦惱の影がはつきりと覗はれた。以前のやうに人を疎んずるやうな微笑は見る事が出来なかつた。

もう四月だといふのに、天鷲絨の冬着に身を包んでゐる。病苦はいまも彼女を惱ま



してゐるのであらう。

彼れの凝視に、マルグリットは気がついたやうに、オペラグラスでこつちを見た。アルマンは周章て、顔をそむけたので、人違ひだと思つたのか、見るのをやめてしまつた。

アルマンは又彼女の方を見ながら、今夜といふ今夜は、どうしても彼女に會つて、苦しい胸の想ひを、うち明けてしまはなければならぬと思つた。會ふ方法をいろいろと考へ始めた。ふと彼れの瞳に、彼れのために役立つてくれさうな人の顔が映つて來た。それは彼れがかなり懇意にしてゐる、元はやつぱりくろとで、いまは、いろいろの知己をたよりに小間物屋をやつてゐるブルウダンス・ヂュベルノアといふ四十近くの女であつた。

そんな頼みならいつでも安々と引受けてくれる女が、すぐ眼の前のボックスにゐたとは、なにより好都合であつた。アルマンはすぐに彼女のボックスへ入つて行つた。「あら、アルマンさん御機嫌よう。」と、ブルウダンスは頓狂な聲で言つて、いつもの

愛嬌たつぷりでしやべり始めた。

話がかなりはずんで來た頃に、アルマンはマルグリットを指さして、「ブルウダンスさん、あれは誰だい」と、訊いて見た。

「マルグリット、ゴオチエさんですよ。あの女は私のお得意で、わたしの家の隣りに住んでゐるんです。あの女の化粧部屋は家の窓と向き合つてます。まいんちいろいろな用をしてあけるんですの。」

『どうだらう僕をあの方の家へ連れて行つて紹介してくれないか。』

『家ぢやむづがしうござんすね。あの女には七十を越した老公爵のお友だちがあつて、それがとてもやきもちやきなんですから。』

マルグリットがバゲエヤの温泉へ保養に行つてゐた時、偶然老公爵に出會つた。公爵が自分の死んだ娘にマルグリットが瓜二つだといふことから交際を求め、今では彼女の爲めに莫大の金を仕送つてゐるなどと、ブルウダンスは詳しく話した。それから此頃は、富豪のN伯爵が毎晩のやうに訪ねて來て、湯水のやうに金を使つてゐるが、

マルグリットの方で嫌つてゐる。あれには情夫がない。伯を手に入れよばよいのにあれも慾のない女だなどと言つた。

『ブルウダンスさん、兎に角今夜は一緒に歸らうよ。友だちも連れて行くから。』  
アルマンは心の中で、すつかり計畫を立てよ言つた。

『ぢやあ一幕見のこしてごいつしよに歸りませう。』と、彼女は喜んで賛成した。

アルマンがボックスから立ち上らうとした時、マルグリットのボックスへ、老公爵が入つて來たのが眼についた。彼れは思はずその方へ氣を取られて、若し自分があの老公爵と代れるなら、十年生命を縮めても構はないと思つた。

アルマンは友人のガストンと一緒に、再びブルウダンスのボックスへ入つて來た。一幕終ると彼等は劇場を出て、一足先に歸つたマルグリットの馬車を追ふやうに、四輪馬車を走らせて行つた。

馬車はアルタン街七番地で止つた。

ブルウダンスは、先刻は店に來られるのを迷惑さうにしてゐたが、急に自慢の店が

見て貰ひたくなつたと見えて、二人を無理に引き止めた、アルマンは思ふ通りになつたのを、心の中で喜んだ。

二人は店の裝飾窓を一寸覗いて、お世辭を二つ三つ並べてから、階段を上つて二階の應接室に通つた。

遠慮なしのガストンは、早速ピアノの前に腰をかけて、とん／＼鍵盤を叩き始めた。『一寸、靜になさいよ、誰かゞよんでゐるぢやありませんか。』と、ブルウダンスは叱り付けるやうに言つた。

なるほど耳をすましてゐると、隣家から呼ぶ聲が聞えた。彼女が言つたとほり、窓から手を出せば届くくらゐ隣家と接近してゐた。

『さア、みなさん歸つて下さい、わたしはすぐお隣りへ行かなくつちやならないんですから。』

『オヤ／＼、それがお客に對する待遇かい、ぢや君が歸るまで待つことにしよう、でなければ一緒に行くか。』と、ガストンが言つた。

『そんなことをされちやどつちも困りますよ。』

斯んなことを言つて、三人が笑談半分に争つてゐるうちに、こんどは大きな呼び聲がすぐ近くで聞えた。ブルウダンスは駈け出して行つて窓を開けると、しきりに何か話し合つた。

『マルグリットさんがお二人も連れてすぐ来るやうにつて。N伯が來てゐてうるさくつてしやうがないから追つ拂ふためにあなたがたを招ぶんですつてさ。』

かう言つて、ブルウダンスは階段を下りて行くので、二人も彼女の後から跟いて行つた。

いざ、マルグリットの家に行くことになる、アルマンの神経は非常に興奮して來て、心臓の鼓動が急に烈しくなつて來た。彼れは全く夢中になつてしまつた。

玄關に入ると、品の好い女中が彼等を案内して客間に通した。

マルグリットは弾きさしの曲をまた弾き始めてゐた。若い男が暖爐の縁に寄りかゝつてピアノを聞くのでもなくほんやり考へ込んでゐた。

### 三

マルグリットは嬉しさうにみんなを迎へた。

『ガストンさんよくいらつしやいましたね。なぜ今夜劇場ぢやアわたしの所へいらつしやらなかつたの。』

『失敬ぢやないかと思つたから。』

『お友だち同志なら失敬なことなんかあれやしませんわ。』

『ではお友だちのよしみとしてアルマン・ヂュバアル君を貴女あなたに紹介しませう。』

『そのことはブルウダンスからもう聞きましたの。』

二人の斯んな會話を聞いてゐるうちに、アルマンは胸を震はしながら、なにか自分も出来るだけうまいことを言はうと考へてゐた。

『僕は前に一度紹介されたことがあります。が、あの時は御迷惑をかけたから却つて忘れて戴いた方がよいくらゐです。いまから三年前オベラ・コミック劇場で、エルネ

トスと……』

彼れは一生懸命になつて言つた。

彼女はその時を想ひ出せぬといふやうに、暫く考へてゐたが、やつと想ひ出したやうに、『さうく、あの時はわたしの方が失禮したんですわ。あの時分には、初めて會つた人を窘めては喜んだもんですの、いまでも時々そんな病氣が起るんですのよ。あなた許して頂戴ね。』と、言つて、美しい手をさしのべたので、アルマンは思ひ切つて接吻した。

彼女は過去のことをいろいろ想ひ出してゐるやうに考へてゐたが、『わたしが悪かつた時毎日訪ねて来て、名前を仰つしやらずに歸つたのはあなたぢやなくつて。』と、訊ねた。

アルマンは微笑しながら點頭いた。

『まあ、あなたはなんといふ親切な方でせう、わたしどう言つてお禮をしたらいいのかわりませんわ。伯なんかはそんな御親切はお持ち合せがありませんわね。』と、皮肉

るやうな口調で伯爵に向つて言つた。

『だつて僕は心安くなつてからまだ二ヶ月にしかならないぢやないか。』

『だつてこの方はまだ五分しか経たないぢやないの、あなたはいつも間の抜けたことばつかりいつてゐるわね。』

かうこつぴどくやられると、伯爵は顔を眞紅にして、黙り込んでしまつた。暫くすると、伯爵は逃げ出すやうに歸つてしまつた。

伯爵がゐなくなると、マルグリットは急にはしやぎ出した。

『まぬけな伯爵を追つ拂つたんで氣がせい／＼したわ。さあ、ごはん／＼』と、子供のやうに飛び上つた。

女中のメニヌはすぐ食事の用意に掛つた。やがてみんな食堂に入つた。

アルマンはマルグリットと向ひ合つて、すゝめられるカッブの酒を時々ほしてゐた。彼れは、彼女を見れば見るほど煮きつけられた。白魚のやうにきれいな、細い指一本さへが、彼れの心を魅惑した。

マルグリットは罪惡の間に立つてはゐるが彼女は貴い眞實さを持つてゐる。彼女はいつでも、もとの可愛らしい處女に歸ることの出来る女である。凡てを捧げつくして彼女を救ひ出さねばならない。——斯んなことをアルマンは考へて、獨り胸を躍らしてゐた。

みんな愉快に喰べたり、飲んだりした。時々ガストンの口から口汚れくちよごになるやうな笑談が出て、女たちをドット笑はした。ほんとに賑やかな楽しい食事であつたが、アルマンだけはさみしくなつて、注いだまゝお酒もカップに残るやうになつた。まだ二十歳になつたばかりで、ほんに可愛い少女のやうなマルグリットが、男のやうに酒をあほつたり、汚きたなぐち口をきいたりするのを、アルマンは悲く思つた。しかし彼女が、さうするのは荒み果てた氣持からではなく、醜い過去を忘れやうとするためであらう！かう考へると、却て熱い同情が胸に溢れて來るのであつた。

マルグリットは先刻から大分三鞭酒シランペンのカップをほしたので、顔を眞紅にしてゐるが急に苦しさうな咳をし始めて、兩手で胸を抱えた。彼女はナブキンで唇を押へて、化

粧室へ駆け込んだ。

『またいつもの咯血なんですよ。うツちやツとけばいいんですよ。』と、ブルウダンスが言つた。

けれどアルマンはじつとしてゐられなかつたので、彼等が止めるのも聞かずに化粧室へ飛び込んで行つた。

室内の机の上には、たつた一本蠟燭が悲しさうに燃えてゐた。マルグリットは胸をほだけたまゝ、長椅子に横たはつて、片手で激しく息づいてゐる胸を押へ、片手は力なくだらり垂らしてゐた。机の上に銀の鉢が置いてあつた。水面には模様を附けたやうに眞紅な血が浮いてゐる。

アルマンは長椅子の傍に奇つて、青ざめた彼女の顔にじつと見入つた。眼をとちて、時々深い呼吸いきをついてゐた。三四分経つて、だいぶ落ちついたやうに見えた時、彼れは彼女の垂れてゐる手を取つた。

『あゝあなたでしたの。』と、さみしい微笑を浮べて、初めて氣がついたやうに言つた。

『こんなことをしてゐちや、あなたは死んでしまひますよ。僕が親類でもあつたら、こんなことはさせておかないのに。』

彼れの聲は悲しく震えてゐた。

『そんなに心配してくださるのはあなただけですわ。みんながわたしの病氣は治りツこはないと見きりをつけてゐるんですもの。』

彼女はかう言つて立ち上ると、蠟燭を持つて鏡に向いた。鏡に映つた彼女の顔は凄

いほど美しかつた。

『わたしのやうな女は死んだつて生きてたつて、なんでもないんですから、もうお構ひなさらないでくださいね。さあ食堂へ参りませう。』

アルマンはさし出された彼女の手を取つて、唇にあてた。と、いまゝでじつと堪へてゐた涙が彼女の手の上に落ちた。

『あなたは子供のやうに泣いていらつしやるのね、ほんとうにお優しい方ね。』

『あなたから見れば馬鹿に見えるかも知れませんが、僕はあなたの容子を見てゐると

悲しくなつたんです。あなたほど、わたしの氣にかゝる人は世界に一人もゐないんです。お願いですからどうぞ身體を大切にしてください。いまゝでのやうな自暴自棄はやめてください。』と、胸いつぱい溢れて来る不憫の情を抑へることが出来ないで、アルマンは言つた。

『だつてわたしは自分のことを氣にかけたら死んでしまひますもの。毎日氣狂ひじみたことをやつてゐるからこそ、辛うじて生きてゐられるんです。わたしのやうな者はさんぐゝ玩具にされた揚句、男の御機嫌がとれなくなつた頃には捨てられてしまふんです。わたしが二ヶ月も病氣をしてゐた時、三週間は誰かゝ見舞ひに来てくれましたが、後は一人も来てくれませんでしたもの。』

『あなたがお嫌やでなかつたら、僕はあなたと兄妹のやうなつもりで看病させよう。きつとあなたの病氣を癒して見せます。病氣が癒つてからも、いまゝでの生活がしたかつたらつゞけるんですね。でもあなたには静かな生活の方が好きぢやないかと思ひます。』

『今夜はお酒で気が滅入つてゐらつしやるから、そんな事をおつしやるんですけど、到底そんな御辛抱は出来るもんぢやありませんわ。』と、彼女は子供にからかふやうに言つた。

『必ずやつて見せます。僕は身も靈もあなたに捧げてゐるんですから。』

アルマンは三年前ブルス街の雜貨店で彼女の姿を見た時から、今日まで一度も忘れたことはないといふことや、さんざん苦しみ悩みつゞけて來たことなどを話した。そして彼女さへ許してくれるなら、毎日でも一緒にゐて、出来る限りつくしたいと言つた。

『では、あなたは私を愛してゐらつしやるんでせう。』

『さう言へばさういへます。でも今夜は言へません。』

『一生そんなことはおつしやらない方がいゝでせう。そんなことをおつしやると、わたしは二つの道のいづれかを取らなければなりません。あなたのお心に従はなければ、あなたはきつと失望をなさるでせうし、若しあなたに従へば、神経質で病身

でいつも哀れつほく鬱いでばかりゐて、しよつちう血ばかり略いてゐる、一年に四萬圓も使ふ戀人をあなたは持つことになります。公爵のやうに金持ちのおぢいさんならいいけど、あなたのやうな若い方に我慢が出來やしません。いまゝでに若い戀人を持つても、いつも見棄てられてしまつたんですもの。』

懺悔するやうな、いたましい彼女の告白に依つて、彼女は絶えず忌はしい生活から逃れやうと苦んでゐるのだといふことが、アルマンにははつきりと判つた。

『わたしたちはなんといふくだらないことを話してゐたんでせう。さあお手をかせて頂戴向ふへまゐりませう。』

マルグリットはかう言つて立ち上らうとした。

『まあお待ちください。初めてあなたにお會ひした時から、あなたのお姿はわたしの心から消えなかつたのです。三年目の今日あなたにお會ひして、一層あなたを思ふやうになつたんです。かうしてお知己ちかづきになつては、もうあなたなしでは私は生きてゐられなくなりました。もしあなたが思つてくださらなげや、わたしは氣が狂つてしまひ

ます。』

『さうおつしやられると失禮でもわたしは「あなたはお金持ちでなければいけないわ」といはなければなりません。わたしは月に三千圓も使ふんですよ。あなたはすぐ財産をおなくしになつてしまふわ。ね、だからお友達としてわたしを可愛がつて頂戴よ。あなたのやうな眞實な、ものに感じ易いお方は、わたしたちの社會に深入りなすつてはいけません。わたしはあなたのおために、なんでも打ち明けて話してゐるんですよ。分つてくださるでせう。』

彼女は子供をさすお母さんのやうな調子でいふのだつた。

『もうそんなことはわたしにおつしやらないことにお約束ませうね。さあ客間にまゐりませう。』

『このまゝあなたとお別れするなら、僕は死んでしまひます。』

『そんなにまであなたはわたしのやうな者を思つてくださいますの、ぢやアあなたはなぜ三年前オペラコミック座でお目にかゝつた翌日にでも打ち明けてくださらなかつ

たんです。』

『あの晩僕は失禮なことをしてしまつたんで、翌る日あなたを訪ねる勇氣がなかつたんです。あの晩はカフェ・アングレエまで行つて遂々あなたのお家まで行つたんです。あなたが一人でお家へ入つたのを見た時、僕はどんなに嬉しかつたか知れませんが。』

『あの時はわたしを待つてゐる人があつたんですよ。』と、マルグリットは言つて、急に笑ひ出した。

『あなたは僕を苦しめやうとなさるんですね、では左様なら。』

アルマンはカツとして、いまにも立ち上らうとした。

『わたしは生娘でもなければ、お姫さまでもないんですよ。今度初めておちかづきになつたばかりのあなたに干渉を受ける覚えはありません。でも若し、わたしがあなたの戀人になるやうなことがあつたら、以前に戀人のあつたことを、あなたはお責めになるでせうね。』

『あなたがいまゝでに會つた男より以上に僕は思つてゐるからです。』



「いつからそんなにおなりになつたの。」

「三年前あなたが雑貨店に入つたのを見た時から……」

「なんといふ貴いお心持ちでせう。わたしは感謝しやうがございませんわ。」

「少しでも愛してくださりさへすれば、僕は満足です。」

アルマンの心臓の鼓動は、もう口が利けないほど激しく打ち始めた。それはいま、彼れのいふことを、凡て嘲笑的微笑の中に消ち打さうとしてゐた彼女が、初めて彼れの眞實を受け入れてくれたからである。

「公爵をどうしたらよいかしらん。」と、彼女は獨語のやうに言つて、急に深く考へ込んだ。

「さうすぐ知れる筈はありません。知れたつて公爵はきつと許してくれます。」

アルマンはかう言つて、だん／＼彼女の傍に寄り添つて腕を彼女の腰のまはりに廻はして細つそりとした身點を引き寄せた。

「僕は長い間の苦しい想ひをやつとあなたに知つていたゞけましたね。」と、彼れは

耳語いた。

「あなたさへわたしのいふことを理由を訊かずに諾いてくだされば、わたしはあなたの思ふとほりになるかも知れませんわ。」

「僕はあなたのいふことならなんでも諾く。」

「わたしはわたしのしたいことを、あなたになんにも言はずにしますよ。わたしを愛してくれ黙つてわたしに愛されてゐるやうな温順おとなしい若い戀人を長い間探してゐたんですがそんな人はたゞ一人もありませんでしたの。男といふ者は叶はないと思つてゐた望みが叶ふと、それだけでは満足しないで、女の過去のことや、現在のことや、將來のことまで詮議しやうとするんです。しまひには女を制御しやうとして、女がいふことをきけば却てひどくするんです。わたしが戀人を持つとすれば、その男は第一に私を信じわたしのいふことを聞き、分別のある方でなくつてはいけないのよ。」

「僕はあなたのいふとほりになります。」

「どうだかいまにだん／＼分りますわ。」

『いまではなぜ分らないんですか。』

『なぜつて』と、マリグリットは急に立ち上つて今朝誰かから贈られた椿の花束から、眞紅なのを一つ取つて、それをボタンの孔に差しながら『條約は調印した日に實行出来るものぢやないでせう。』

彼女の言ふ意味は、アルマンにすぐ分つた。

『こんどはいつ會つてくださる？』と、彼れはマリグリットの身體をしつかり抱きしめて言つた。

『この椿の花の色が變る時。』

『それはいつでせう？』

『明晩の十一時から十二時の間よ。それでよくつて？』

『勿論いいにきまつてゐます。』

『さあわたしを抱いて頂戴、客間へまゐりませう。』

アルマンは力いつぱい彼女を抱擁した。彼女が亂れた髪を梳かしてから二人はその

室を出た。

マルグリットは一寸立ち止まつた。アルマンの耳に口を寄せて、『あなたから打ち明けられて、すくなびくなんて、あなたは不思議に思やあしない。そのわけがお分りになつて？』と、彼女はアルマンの手を取つて、動悸の激しい自分の胸にあてながら、『わたくしはもう長くは生きてゐられないのよ。だから短い生命の間に、ほんとうの生活がしたいと決心したからなの。』

『そんな悲しいことをいはないでください。』と、アルマンは懇願するやうに言つた。

マルグリットはかなりの亢奮をかくすやうに、歌を唄ひながら客間へ入つて行つた。アルマンはあまりの喜びに、半狂亂のやうな氣持ちでゐた。

それから十分ばかりして彼れはガストンと一緒にマルグリットの家を出た。

外に出ると、『若い、マルグリットと何を話してゐたんだね。』と、ガストンが訊ねた。

『彼女は天使のやうな女だ。僕は狂ふほど彼女を戀してゐる。』

『さうだらうと思つた。君はうちあけたかい。』

『うむ、うち明けた。』

『うんといつたかい？』

『いや。』と、アルマンは答へたつきり、もうなんにも言はなかつた。

## 四

アルマンは家へ歸つて來てもすぐ寢ずに、けふの出來事を繰り返し考へてゐた。三年ぶりでマルグリットに會つたこと、彼女に紹介されたこと、彼女との約束を順々に考へて見ると、凡てがあんまり急に進行してしまつたので、まるで夢のやうに思はれるのであつた。そして今夜彼女が言つた凡てのことも、夢の中の噂語のやうに疑はしく思はれるのである。けれど、あゝ……社會の女が、初めての男から戀を打ちあけられたその翌日、すぐ男に逢ふなんていふのは、當然なことであると思へばそれまでなのであるが、彼女をさうした種類の女とはどうしても思へなかつた。

彼れはしまひに、なにがなんだか分らなくなつてしまつた。自分は金持ちでもなく、

美男子でもない。彼女は全く氣まぐれにあんな約束をしたのであらう。間もなく自分の戀は破れてしまふのではないか。あすの晩の訪問はやめやう、このまゝ巴里を去つて、その理由を後で手紙で送つた方が、恰愴なやりかたではないかと考へた。が、いつの間にか、彼女と同棲するやうになつた時の楽しい生活の場面を思ひ浮べて、自分は彼女の心と肉體の病氣を癒してやる。生涯彼女と一緒に暮す。さうすれば彼女の愛は、處女の愛よりも自分に取つて幸福であらうなどと思ひつゞけるのであつた。

かうしたいろくな考へに惱まされてゐるうちに、彼れはぐつたりと疲れてしまつた。夜が明けてから、彼れは床に就いた。

眼を覺ましたのは午後二時頃であつた。空は美しく澄みちぎつてゐた。彼れは昨夜の彼女に對する疑惑をすつかり忘れてしまつた。今夜の會合ばかりをさまふくと心に描いた。人生はどんなにか美しく、希望が満々としてゐるやうに、彼れは生れて初めて考へた。喜びと希望のために、彼れの身體は自然に躍り出して、室内にじつとしてゐられなくなつた。

彼れは戸外へ飛び出した。そして、いままででないやうな親しさで、會ふ人々を眺めた。

一時間ばかりシュヴオウド・マリイと、ロンボアンの間をぶら／＼歩いてから、彼れは宅に歸つて來たが、柱時計と懐中時計とを見較べてゐるばかりで、ちつとも落ちついてゐれなかつた。三時間もかゝつて、念入りの身繕ひをして、十時半になると、彼は立ち上つた。

アンタン街にはすぐ近くのプロヴァンス街に彼れは住んでゐたので、道を少し遠廻りしてアンタン街へ出た。マルグリットの家の窓を見ると、あかりが點いてゐたので、彼れはすぐ門のベルを鳴らした。中から玄關番が出て來て、主人は十一時か十一時十五分ぐらゐでなければ歸らないといふので、時計を出して見ると、まだ十時四十分であつた。仕方がなしはアルマンは、その邊のさみしい街をぶら／＼歩いてゐたが、三十分も経つと、マルグリットは歸つて來た。馬車から下りると、彼女は誰れかを探すやうに四邊を見廻はしてゐた。

『今晚は！』と、アルマンは聲をかけた。

『あゝ、あなたでしたの』と言つた調子は、彼れに會ふのを喜んでゐるのだとは、どうしても思はれなかつた。

『あなたは今晚くるやうにつて言つたじやありませんか。』と、急所を突くやうに言つた。

『さうでしたわね。つい忘れちまつて。』

かうした彼女の軽々しい調子に、アルマンはいままで抱いてゐた楽しい希望が、急に打ち消されるやうな寂しい氣持ちがした。でも、彼女は變つた氣質の女だと考へ直して、努めて腹を立てずに彼女の後から家に入つて行つた。

家に入るとすぐマルグリットは、『ブルウダンスはまだ歸らないかい、歸つたらすぐ來てくれるやうに言つて來ておくれ。』と、女中のナニイノになにか急用があるやうに言つた。

アルマンにはどうしても彼女が迷惑がつてゐるやうに見えるので、彼れはどうして

よいのか判らなくなつて寢室へ入つて行く彼女の姿を見送つてゐた。

彼女は天鵝絨の着物と帽子とを寢臺の上に放り出して、煖爐の傍にある長椅子に腰をおろした。

しばらくすると、アルマンと呼ぶ聲がしたので、彼れは寢室へ入つて行つた。

『なにか面白いお話はないこと。』

彼女は時計の鎖をいぢりながら言つた。

『なんにもありませんね。あなたは當惑なさつてゐるやうだが、僕が邪魔ぢやないんですか。』

『そんなことはありませんわ。たゞわたし加減が悪いの、昨夜ちつともねむらなかつたんでひどく頭痛がするんですの。』

『僕は歸りますから、おやすみになつたらいいでせう。』

『ゐらしてもいいのよ。わたしはねむくなつたら構はずにねるから。』

斯んな會話が二人の間に交はされてゐる時、突然案内を乞ふベルが鳴つた。女中の

ナニイヌが未だ歸つてゐないと見えて、ベルは續いてやかましく鳴つた。彼女は焦れつたさうに立ち上つて、玄關に出て行つた。客は例のG伯爵であつた。彼女は伯爵を食堂へ通すなり、『あれほどおことはりしたぢやありませんか。どこへでも他へいらつしやい。』と、恐ろしい權幕で呟鳴りつけて、出て來てしまつたので、伯はぶつ／＼言ひながら歸つてしまつた。

『あんな奴が來たらいつもゐないつてきつぱりことはつておくれ。金さへ出せば女はどうにでもなると思つてゐる男の顔を見るとうんざりする。斯んな稼業を初めからよく知つてゐたら女中にでもなるんだつたが、つい綺麗な着物や、ダイヤモンドや馬車が欲しかつたから、こんな稼業に引き込まれたのさ。身體も心もこわされてしまつて世間からは獸のやうにいやがられ、それで自分は何ひとつ得ないで、人にみんな吸ひ取られてしまふ、終ひに他人も零落させ、自分も零落して、犬のやうにのたれ死をするんさ。』と、マルグリットは氣でも狂つたやうに大聲で言つた。

『奥さま、お氣をお静めなさいませ』と、女中のメニイヌはおど／＼して言つた。

マルグリットは重苦しく堪へ難いといふやうに着物を脱ぐと、寝衣ねまきを持って來さして着換へた。そして、ボンチと、パテと、鶏と、他のものをメニエヌに命じた。

『一緒に食事をしますから、あなたはゐてくださいよ。わたしは化粧室へ行つて來ますから。』と、彼女は言つて寢室から出て行つた。

『彼女は現在の生活から逃れやうとして死ぬほど苦しんでゐるんだ。』と、アルマンは思つてまた一層憐れみを抱いた。彼れがいろ／＼なことを考へながら室内をぶら／＼歩いてゐると、ブルウダンスが入つて來た。

『オヤ、あなたがこゝにゐらつしつたの、マルグリットさんは？』

『化粧室だよ。』

『ぢや、こゝで待つてゐませう。もしあなた、マルグリットさんはあなたにとつても惚れてんのよ。』

『だつてあの人は無愛想だよ。』

『いますぐによくなりますよ。わたしが吉報を持つて來たから。』と、ブルウダンスが

言つた時、黄白い房の下つた、格好のよい小さな帽子を冠つたマルグリットが室の入口に立つた。

素足に縞子のスリッパを穿いて、爪の手入れをしながら室内へ歩いて來る彼女の姿はうつとりさせられるほど美しかった。

彼女はブルウダンスが公爵のところから取つて來た二千五百圓を受け取ると、機嫌をすつかり直した。

『公爵にはほんとお氣の毒だわね。』と、彼女は心からすまないと思つてゐるやうに言つて、何かつゞけていはうとしたが、詮方がないといふやうに口をつぐんでしまつた。

ブルウダンスは百五十圓だけ借財を彼女に頼んで、戀人のシャルルが來てゐるからと、すぐ歸つてしまつた。

『ごめんなさいね。わたし横になりますから、わたしの傍へ寄つてかけてくださいね。』マルグリットはかう言つて、寢臺の上ですぐ横になつた。

アルマンは遠慮がちに寢臺に腰をおろした。

『さつきはあんなに當りちらしてすみませんでしたわね。ゆるしてくださいさる?』と、彼女はアルマンの手を固く握つて言つた。

『あなたのことならどんなことでも。』と、アルマンは急き込むやうな調子で答へた。

『あなたはわたしを思つてゐてくださるの?』

『氣が狂ひさうになるほど……。』

『こんなに我儘でも?』

『そんなことは少しも構はない。』

『ほんとう?』

『え、』と、アルマンは低いが、熱のこもつた聲で答へた。

その時、ナニイヌが鶏の冷肉と、苺と、葡萄酒を一本持つて來た。

『ボンチは身體にお悪いと思つて葡萄酒を持つに來ました。』と、ナニイヌは言つた。

『それはなによりだ。』と、アルマンは思はず叫んだ。

『それでいいよ。』と、マルグリットも言つた。

ナニイヌが出て行くと、戸に錠をかける音がした。

『あすはお晝まで誰れが來ても家へ入れちやいけないよ。』と、マルグリットは言つた。

アルマンはぐつすり寝込んでしまつて、夜の明けるのも知らなかつた。

曙の薄明りが窓かけを通して、ちら／＼と忍び込んで來た頃、アルマンはマルグリットに起された。

『ごめんなさいね。あなたを追ひ出すんぢやないのよ。公爵が毎朝來るんですの』

アルマンは髪の亂れてゐる彼女の頭を抱いて熱い接吻をした。

『こんどはいつ訪ねやう?』

『今日中に手紙をあけるからその中に書いておくわ。あなたはわたしのいふことなら何んでも諾く約束ね。』

『それや勿論さ。でも僕の頼みもきいてくれる?』

『頼みつて何?』

『僕はこの鍵が欲しいんだよ。』

『ぢや持つていらつしやい。でもわたし次第でその鍵は役立たなくなるのよ。内側に掛金があるんですもの。あれは除つておきますよ。』

『ぢや、少しは僕を愛してゐるんだね。』

『なんだかさうらしいのよ。さあお歸りなさい。わたしは睡くつてしやうがないんだから。』

アルマンは別れを惜んで外へ出た。

廣い市はまだ靜にねむつてゐた。彼れは靜かな市に云ひ知れぬ親しみを感じながら歩いて行つた。彼れはこの世界に、自分より幸福な者はないやうに考へてゐた。

家に歸つてからも、彼れの胸は喜びに滿されてゐた。もう全く彼女と自分とを隔てゝゐる垣は、すつかり取り去られてしまつたやうに彼れは思つた。彼女の部屋の鍵を持つてゐるといふことが、どんなにか嬉しかつた。生きてゐるといふことは何んといふ楽しいことであらう。自分は誰よりも幸運に生れついたのだ。——かう思つて、彼

れはもうすつかり有頂天な氣持になつて行つた。

『マルグリットが實際に感じない愛を粧ふはずはない。肉體の感覺から誘はれて男を戀した女は、いつか精神上の愛の秘密を知つて、やがては精神的な愛に生きやうとするであらう。精神的な愛ばかりを信じて、結婚した女は間もなく肉體的愛の秘密を知るであらう。』斯んなことを考へてゐるうちに、アルマンはいつか睡りに落ちて行つた。

下男が手紙ですよと言つて、彼れの室に入つて來た時、アルマンは吃驚して眼を覺した。手紙を開いて見ると、『これはわたしの命令です。今夜ヴォウドビルへ三幕目の幕合にいらつしやい。』と、書いてあつた。

彼れは手紙を机の抽斗にしまつた。全く彼れは絶えず夢を見てゐるやうな氣持ばかりしてゐたので、その證據にその手紙を出して見るためであつた。

彼れは午後七時に、ヴォウドビルへ出かけて行つた。そんなに早く劇場へ行つたことは初めてであつた。

時が經つのに連れて、坐席は全部滿たされてしまつたが、舞臺に近い一段低くなつ



てるる列のボックスが空いてゐたので、マルグリットはあのボックスへ來るに違ひないと、アルマンはその方ばかり注意して見てゐた。

三幕目の幕が開くと、彼れがじつと見てゐたボックスに、マルグリットの姿が現はれた。彼女は前の方に出て、二階の坐席を見廻はして、アルマンの姿を見つけると、眼で挨拶をした。

今夜のマルグリットは、まるで女王のやうに氣高く美しかつた。觀客の視線が、一齊に彼女に向けられた舞臺の俳優までが、見物の氣を奪つたのは何物であらうと、彼女の方を見たほどであつた。

『あの美しい女の部屋の鍵を僕は持つてゐるんだ。』と、アルマンは心の中で言つて、いひ知れぬ喜びを感じてゐた。彼れの瞳には、彼女の姿より他なんにも映らなかつた。しかし、彼女に次いで、ブルウダンスの姿が現はれ、つゞいてG伯爵の姿が現はれた時、いままで喜びに躍つてゐた彼れの心は、急に暗く沈んでしまつた。

幕が閉まると、マルグリットは伯に何か話してゐたが、やがて伯爵はボックスから

出て行つた。マルグリットはアルマンの方に向つて手招ぎをした。

彼れは急いでマルグリットのところへ行つた。椅子をすゝめられても、彼れは腰をかけずにボックスの後の方に立つてゐた。遂々マルグリットは立ち上つた。

『あなた今夜どうかしたんですの？』と、彼女はアルマンの額に接吻しながら言つた。

『少し氣分が悪いの。』と、彼れは眉をしかめて言つた。

『お悪いならお宅へ歸つておやすみなさいよ。』と、いつものやうに皮肉をいふ。

『僕が宅でねられないのは知つてゐるぢやないか。』

『そんならわたしが男とボックスにゐたからつて、そんなすねた顔を見せに來なかつていゝぢやないの。』

『男がゐるたからつていふわけぢやない。』

『いゝえ、さうよ、あなたが悪いのよ。もういゝからブルウダンスの家へ行つて待つていらつしやい。』

彼れにはいやとはどうしたつていへる筈はなかつた。

「ねえあなた、わたしのことを思つてゐた？」

「朝から晩まで。」

「わたしはあなたがほんとうに好きになれやしないかと心配してゐるのを、あなたは知らないでせう。ブルウダンスさんに訊いてごらんなさい。」

「アルマンさん、ほんとうよ。」と、ブルウダンスが傍から口を入れた。

「さあ、あなたの席へお歸りなさい。伯がもう來ますから。」

「もしあなたが此處へ來たいと前に知らしてくれれば、僕だつて伯のやうにボックスを取つておいたのに。」

「あの人はわたしが頼みもしないのに取つておいてくれたんですよ。誘はれれば断はれないぐらゐのことはあなただつて知つてゐるぢやありませんか。ひとが折角手紙まで出して知らしたのに、あなたがそんなことをいふなら、わたしだつてその積りでゐるわ。」

「僕が悪かつた。許して、許して。」

「早くあなたの席へいらつしやいよ。もうやきつこなしよ。」

かう言つて彼女は、もう一度アルマンに接吻した。

アルマンは自分の席へ歸つて來た。そして、以前に彼女の戀人であつたG伯爵と、彼女が芝居を見に來てゐるといふことは、なんの不思議もないことで、マルグリットのやうな女を戀人にしてゐる以上、さうした日常生活は許さなければならぬ筈だとアルマンは思つたが、どうしても不満でならなかつた。

十五分ばかり経つと、彼女の命令どほりアルマンはブルウダンスの家に來てゐた。

## 五

アルマンはたつた一人二階の客間で、マルグリットに會へる時を待つてゐたが、だん／＼時間が経つにつれて、待つてゐることがたまらなく苦痛になつて來た。彼女とG伯爵とが、一緒にゐる場面などが、意地悪く描き出されたりして來ると、一層焦々して來て、じつとしてゐられなくなつた。彼れは床下をどん／＼踏み鳴らしながら、部

屋中を歩き廻つてゐた。

『あなたどうしたんですよ。氣でも狂つたんですか。マルグリットさんはG伯といまお部屋にゐますよ。』と、いま歸つて來たブルウダンスは大きな聲で言つた。

『G伯が歸るまでこゝに待つてゐる僕の氣持を考へてごらん。』と、さも不平らしくアルマンは言つた。

『それやあなたが無理ですよ。いままでもさんぐ世話になり、今でも莫大なお金を貰つてゐる伯爵を追ひ出すわけにや行かないぢやありませんか。あの女はあなたにたさう惚れてゐるが、あんまり深入りしちやいけませんよ。あなたの年に三四千の收入ぢやあの女の馬車代にも足りやしない。一二ヶ月情夫になつてゐるつもりでゐらつしやいよ。あなたは巴里第一の美人を思ふとほりにして、一文も拂はなくなつて、立派な部屋へとほされ、ダイヤづくめの盛装で迎へられるんぢやありませんか。それで不足をいふのは、あなたもあんまり欲が深過ぎるわ。』

ブルウダンスの言葉はもつともだと思はれたが、伯がマルグリットの情夫だと思ふと、アルマンはどうしても許しがたい氣持ちがした。

『公爵は老人だから關係のないことは判つてゐるが伯爵はどんなもんだか。兎に角二人も情夫があるなんて許せないこつたよ。』

『あなたは坊ちやんね。巴里では門閥家の婦人たちでも、三人も四人も情夫を持つて恥としない女がたくさんあるんですからね。立派にやらうと思へばどうしてもそんなことをしなければやね。マルグリットさんには年々三萬圓づつくれる親切な老公爵がついてゐるから、さうみだらなことをしなくつてもすむんですよ。わたしはあゝした女たちと二十年も一緒にゐるたからあの女たちの善惡がよく分るんです。あなたはあの女の浮氣を眞面目に考へないやうにね。あなたのことが公爵にも伯爵にも知れて手が切れてごらんない。それこそあなたは大變です。連れ添つたとしても結局は不幸で、出世も出來なければ、家庭も持てません。あゝいふ女はやつぱりあゝいふ女として見なければなりません。あの女から恩を被るやうなことをしてはいけませんよ。』

彼女のいふことは確に間違つてゐなかつたが、アルマンは何も言へずに、彼女の手

を取つて忠告に感謝した。

『もう斯んなお話はやめて、伯爵の歸るまでも見ませう』と、ブルウダンスは言つた。二人はバルコンに出て外を見た。

アルマンは深い物想ひに沈んだ。『人生は短い。人間の感情はそれより一層推移する』と、彼れは獨語して、自分はマルグリットを知つてまだ二日しかないのに、自分の生命、靈、すべては彼女の自由になつてしまつたのだと心の中で言つた。

暫くすると、伯爵はマルグリットの家を出て、馬車で歸つて行つた。間もなく、マルグリットの呼ぶ聲がしたので、アルマンはブルウダンスと一緒にすぐ出かけた。

アルマンが部屋に入つて行くと、マルグリットは走り寄つて、力いっぱい抱擁をした。

『あなたまだすねてるの？』

『いえ、もうすんだの、わたしが説教をしたんで、おとなしい坊ちゃんになるつて約束をしたのよ。』と、ブルウダンスが言つた。

『それやよかつたわね』と、マルグリットは嬉しさうにブルウダンスの顔を見て笑つた。

アルマンは彼女の寢臺をちらりと見たが、亂れてゐなかつたのに、却て恥しい氣がした。

食事が済むと、室内はアルマンとマルグリットと二人だけになつた。

彼女はいつものやうにストウブの近くに坐ると、火に見入りながら、何か考へ込んだ。

アルマンは燃ゆるやうな愛を抱いて、美しい彼女の横顔にじつと見入つてゐたが、この女のために自分はどんな苦勞をしなければならぬのかと思ふと、胸は激しく震えるのである。

『わたし計畫があるのよ。それが成功さへすればここ一ヶ月すると、わたしは自由な身となつて借金もなくなり、この夏は二人で田舎へ行つて暮らせるやうになるのよ。』  
『それを一人でやるつもり？』

『わたし一人で骨を折つて見るの。成功したら儲けは二人で分けるの。』  
儲けと聞くと、アルマンは顔を赤らめたほど、恥しい想ひをした。

『僕はそんな儲けを貰ふのはいやだ。G伯爵が關係してゐるんだらう。僕は關係しない代りに、お蔭にも預らないよ。』と、アルマンは立ち上つて重い調子で言つた。

『あなたは坊ちゃんね。わたしを愛してはくれないのね。いゝことよ。』と、いつものすてばちな調子で言つて、彼女は立ち上つた。ピアノの前に行つて、ワルツのインヴェテエションを弾き始めた。

その曲はアルマンが初めてこの家を訪ねた時、彼女が弾いてゐた曲で、軽い靜かな音律が、なつかしい最初の夜をしきりに思ひ出させる。アルマンはたまらなくなつて彼女の傍に駆け寄つた。そして、彼女の肩に両手をかけて、後からしつかりと抱きしめた。

『もうかんにんしてね、僕はなんでもいふことをきくから。』と、アルマンは哀願するやうに言つた。

『かんにんしてあけるわよ。でもあなたは、お約束してから二日目にもうわたしの約束を守つてくだらないんだもの。』

『だつて僕はおまへを愛しすぎてゐるから、一寸したことでも氣に掛るんだもの、話してくれさへすれば心配しやしないのに。』

『では言ひますわ。』と、彼女は愛らしい微笑を浮べながら、『わたしはね靜かな田舎であなたと二人ぎりで暮したくなつたのよ。さうすればわたしの身體のためにもいゝしわたしたちだつてもつと愛し合つて幸福になれるわよ。わたしは巴里がつくぐいやになつたの。田舎で育つた女だから、子供時分のことを想ひ出して田舎で暮したらどんなに楽しいか知れやしない。でも長い間田舎へ行くには、家の方を片づけていかなければならないでせう。その片づける方法をわたしは考へたのよ。あなたは心配なかなさらないで、わたしのいふことをきけばいゝんですよ。ねえあなた一生に一度のお願ひだから一緒に行つて頂戴。』

アルマンはすぐその場で答へることは、どうしても出来なかつた。

一時間の後、マルグリットは彼れの胸に抱かれて、靜かに夢を結んでゐた。翌る朝六時に、アルマンは歸る時、『では今夜までに。』と、マルグリットに言つた。彼女は何とも答へずに、たゞ彼れを強く抱擁した。

この日の午後、マルグリットから、アルマンの所へ手紙が届いた。

『彼れは急いで封を切つて見た。』わたしの可愛い坊や。わたしは加減が悪いので、お醫者さまが寝てゐなくつちやいけないといふの、今夜は早寝をしますから、あなたには會はないことよ。そのかはり明日のお晝においでなさい。待つてゐます。』

これだけ讀み終へると、マルグリットは、自分を欺すんだなと、彼れは直感した。きつとだれか他の男と、會つてゐるのに違ひないと思ふと、嫉妬が火のやうに胸に燃えて、アルマンは家にじつとしてゐられなくなつた。

『さうだ、あの鍵で部屋を開けて、もし男がゐたら擲りつけてやらう。』と、心を決めて、最初會つた時、貰つて來た鍵を持つて、彼れは亢奮して飛び出した。

先づシャンゼリゼエに行つて四時間もゐたが彼女の姿は見當らない。劇場といふ劇

場は全部探して見たが、彼女はゐなかつた。

十一時頃アンタン街へ行つて見たが、マルグリットの部屋には燈火がついてゐなかつた。

アルマンは構はず鈴ベルを押してた。

『御主人はゐませんよ。』と、門番は呶鳴るやうに言つた。

『では上つてまつてゐませう。』

『だれも家にゐませんよ。』

門番はマルグリットの命令で、斯んなことをいふのである。

鍵を持つてゐるので、ずん／＼行けばよいのであるが、いざとなると氣の弱いアルマンには出來なかつた。

けれど、このまゝ歸つてしまふことは、どうしても忍びなかつたので、その邊をうろ／＼して容子を窺ふことにした。さうすればきつと疑ひが確められるやうに彼は思つた。

午前一時近くなつて、たしかに見覚えのある馬車が九番地の前で止まつた。G伯爵が馬車から下りた。馬車だけは先に歸つてしまつた。

アルマンは激しい胸さわぎを抑へて、闇の中に伯の姿をじつと見送つてゐた。自分と同じやうに、伯も門前拂ひを喰はされるやうにと、彼れは心の中で願つた。が、いつまで、經つても伯は出て來なかつた。

東の空が薄明るくなるまで、アルマンはそこに立つてゐた。彼れはもう歩く元氣さへ失つてしまつたやうに、疲れ切つてしまつた。まるで子供のやうに彼れは泣いた。

## 六

その翌日、アルマンは田舎へ歸つてしまふことに心を定めてしまつた。

もうマルグリットのことは忘れてしまはう。悪夢であつたと斷念めてしまはう。

彼女はやつぱり醜い普通の賣女だつたのだ。田舎へ歸れば、父親と妹とが、貴いほんとうの愛で包んでくれる——かう思つて、今日すぐにも巴里を立たうとしたが、彼女

に何事も告げずに去つてしまふことは、どうしても出來なかつた。

もう未練がましいことは一字も書かないことにして、最後の手紙を彼女に送ることにした。しかしいざペンを取ると、憤怒と悲哀が胸いつばいになつて、ペン先は思ふやう運ばれない。

『昨夜の御病氣はさほど大したことはなかつたやうに察してゐます。昨夜十一時にあなたをお訪ねしたら、まだお歸りならないとのことでした。しかしG伯爵は幸福でした。わたくしがお訪ねしたすぐ後から訪ねて、朝の四時まであなたの部屋にゐられたやうです。ほんとに短い間ではありましたが、御迷惑をかけたことをお許し下さい。あなたと幸福な時間を過したことは、決して忘れません。わたしはあなたを愛するに足るほどの金持ちでないし、またあなたの注文通りにあなたを愛する貧乏人でもありません。だからあなたには興味のない私の名を忘れて下さい。わたくしは望みのない幸福を忘れませう。次に鍵をお返へしします。私は一度も使ひませんでした。しかしあなたは昨日のやうに度々病氣をなさると、この鍵が御入用でせう。私は父の許へ歸

ります。』

アルマンはなんども繰り返して読んで見て、自分はやつぱり彼女を思つてゐるといふことを、證據立てるやうな手紙であると思つたが、皮肉な文句が彼女を苦しめるのに十分だと思つたので、午前八時に下男のジョゼブに持たしてやつた。

手紙を出してしまふと、やつと復讐をすましたやうな氣がして、彼れは少し落ちついた氣持ちになれたが、彼女がどんな返事をよこすだらうと考へると、たまらなくやきもきして來て、使ひの歸りが頻りに待たれた。

ジョゼブはやがて歸つて來たが、返事は持つてゐなかつた。

返事が來ないとなると、あんな手紙をやつたことが、急に後悔され出した。最初から彼女を訪ねて、話をさせて許してやればよかつたと思つて、手紙を取戻さうかと考へたがそれは時間が経ち過ぎてゐた。

柱時計が十二時を打つた時、彼れは思ひ切つて出かけやうと思つたが、鎖で縛られたやうな束縛を感じて、立ち上ることが出來なかつた。でも家にじつとして、返事を

待つてゐることは苦しくつてたまらなかつたので、晝すぎになつてから、彼れは家を飛び出して、あてもなく町を逍遙つてゐた。

往來の眞中で友人のガストンに突然會つた。

『君は幸福だね。巴里一の美人を戀人に持つて。あの女は誰れのいふことでもめつたに聞く女ぢやないんだから、いつまでも愛してやりたまへ。』

斯んなことをガストンから言はれて、自分が悪かつたことが、しみじみ感じられた。家に歸つて見て返事は來てゐなかつた。

夜になると、彼れは一層苦んで、自分のやりかたはあまり鄙劣であつたと悲んだ。

あんな事さへしなかつたら、今頃は彼女の可愛い聲を聞くことが出來たのにと思ふと、胸が破れそうに苦しかつた。

彼女は忌はしい生活から逃れて、清い愛の生活に生きやうとしてゐるのだ。それは自分を愛してゐるからだ。その純眞な愛に對して自分は醜い皮肉な手段を報ひて、彼女の希望を破壊してしまつたのだ。自分はなんといふ鄙劣な情ない男であらうーか



う思ふと、發熱さへして来て、苦しい寢返りの中に、一夜を明かした。

彼れは遂々謝罪することに心を定めて、次のやうな手紙をマルグリットに送つた。  
 『人情といふことに氣のつかなかつたある鄙劣な男が、あなたに送つた手紙に就いて非常に愼んでゐます。もしあなたが許してくださいならなければ、あす巴里を去らうとしてゐます。あなたの膝下に跪いて、その罪を悔ひることは出来ないでせうか、どうぞお目にかゝれる時間をお知らせ下さいまし。』

夜の十一時になつても返事は來なかつた。彼れは仕方がなく翌朝巴里を去ることにきめて、荷造りを初めた。

新しく雇つた下男ジョゼブに手傳はせて、一時間も掛つてやうやく荷造りをすますと、アルマンは寢室に入つたが、どうしても睡ることは出来なかつた。

突然玄關の鈴が鳴り響いた。今時分だれが訪ねて來たのであらうと、アルマンは怪んだが、下男のジョゼブに命じて、すぐ玄關を開けさせた。

『アルマンさん、わたしたちよ。』と、聞き覚えのあるブルウダンスの聲がしたので、

彼れは周章て、寢室から飛び出した。

室内をきよろしく見廻はしてゐるブルウダンスの後に、長椅子に腰をかけて、何か考へてゐるやうなさみしいマリグリットの顔を見出した時、アルマンは夢中で、彼女の傍に駆け寄つた。彼れは跪ひざまづいて、彼女の両手を握り低い震え聲で許しを求めた。  
 『あなたを宥すのはこれで三度目よ。』と、彼女は言つて、彼れの額に接吻した。

『僕は明朝巴里を去らうとしてゐたんです。』

彼れはやつと口を切つた。

『わたしはあなたの立つのを止めに來たんぢやないんだから、やめなくつてもよござんすよ、わたしが怒おこつてゐると思はれるのが嫌だから手紙を書くかはりにやつて來たのよ。でもブルウダンスがお二人住居の處へ行つてはお邪魔になるからつて言つたのよ。』

『アルマンさんは女と二人楽しく暮してゐるだらうと思つてたからさ。』と、ブルウダンスは横合から口を入れた。

「ブルウダンス、おまへなぜそんな出鱈目をいふの？」と、アルマンは答めるやうに言つた。

『しかし、好いお部屋だわね、寢室を拜見させてね。』

彼女は言ひ過ぎを胡魔化さうとして、氣を利かしたやうにその場を外した。

『なぜあんな女を連れて來たの？』と、アルマンは訊ねた。

『芝居の歸りなの、こゝから一人で歸るのはさみしいから。』

『僕が送つてはいけないの？』

『いけないことはないけど、あなたに送つて貰へばきつと家へ入るといふだらうし、入れるわけに行かないし、入れなければあなたは又憤るでせう。』

『なぜ入つちやいけないの？』

『だつてわたしの身にはいつも監視がついてゐて、疑はれたら大變ですもの。』

『それはどういふ譯なの？』

『わけがあればいふわ。お互ひに秘密はない筈ぢやないの。』

『僕思ひ切つていふけど、マルグリットは僕を思つてゐてくれるの？』

『思つてゐますとも。』

『そんならなぜ僕を欺したの？』

『あなた考へてごらんなさい。わたしが十萬圓も收人のある貴族の夫人なら、あなたからさう聞かれれば一言もないけど、わたしはたゞのマルグリット・ゴオチエよ、二萬圓の借金があつて、年に四萬圓の費用がかかるのよ。それで一文なしよ。かう言へばあなたも尋ねる用はなし、私だつて答へは不要よ。』

『それやその通りだ。僕は氣狂ひのやうになつておまへを愛してゐるから。』

『これからはもつと分別のある愛しかたをしてくださるか、わたしの氣持ちをよく知つてくださるかしなくつちや。わたしが自由な身體になればそんなことはしやしないわ。あの晩あれほど頼んだのにあなたは背いてくれなかつたぢやないの。あの時一萬圓のお金をあなたから借りればそれですんだんだけど、マルグリット・ゴオチエはあなたにびた一文も強請らずに、借金を返へす方法を取つたんですから、立派に情をあなた

たに立てたつもりなの。わたしたちは時と場合で心の満足を買ふために、身を賣らなくつちやならないのよ。そんな辛ひ思ひをして、折角の楽しみが逃けてしまふんぢやどんなに悲しいか知れやしないわ。』

かう心の底からしみじみ言はれると、アルマンもう言葉もなくなつて、滲み出る涙をやう／＼堪へてゐた。

マルグリットはまた靜かに言葉をつゞけた。

『わたしたちはそれや浮氣者には違ひないけど、その浮氣が慰めにもなれば、楽しみにもなるのよ。自分でも不思議に思ふくらゐ早くあなたに身を任せてしまつたのは何故だか知つてゐる？それはね、わたしが血を啗いた時あなたがわたしの手を取つて泣いてくれたからなの。わたしを不憫に思つてくれたのはあなた一人だつたんですもの。馬鹿な話だけれど、わたしは以前犬を飼つてゐたことがあるのよ。その犬は私が咳をする心配さうにわたしの顔を見るの。その犬が死んだ時わたしはお母さんが死んだ時より悲しかつたわ。お母さんは十二年わたしを毆ちつゞけたんですもの。いまゝで

わたしがほんとに愛してゐたのは、その犬だけでした。でもあなたゞけは、よく分つてくれてほんとうに愛し合へると思つてゐたのに、あの手紙で見ればあなたは人情のない方ね。ずるぶん意地悪い嫉妬やきもちやきだわ。あの時晝食と一緒に食べて惱みを晴らさうと思つてゐたのに、あの手紙ですもの、わたしの悲しみと言つたら——』と言つて苦しさに吐息をついた。美しい彼女の瞳には涙が光つてゐた。

『悪かつた、わるかつた。僕はくるしい。』と、アルマンは狂氣のやうに叫んだ。

彼女はまた言葉をつゞける。

『あなただけはわたしの言ひたいことがいへる人だと思つてゐました。わたしはね、いつも病氣で鬱いでばかりゐるでせう。だからたつた一つのわたしの希ひは、わたしの心持ちを知つて下さる方がほしかつたんです。老公爵なら申しぶんはありませんが、あの方は老人で慰みにも頼りにもなりません。わたし噴火口へでも飛び込んで自殺しやうかと考へてゐたんです。その時偶然出會つたのがあなたで、あなたは年は若く、情の熱い、好い方だから、いまゝでわたしが待つてゐた人だと一圖に思ひ込んでしま

つたの。さうしてわたしの思ふとほりの人にしやうとしたの。ところがあなたは、それを嫌つて獨りで威張り散らすんだもの、それぢや普通の情夫と違ひはあれやしないわ。外の男と同様にお金をお拂ひなさい。それでもうお互ひになんにもいひつこなしにしませう。』

マルグリットはあんまり長く話しつゝけたので、疲れたやうに長椅子に身を投げかけた。そして出やうとする咳を押へるやうに手巾ハンケチを口にあてた。

『僕が悪かつた。どうぞ許して。僕等はこれからほんとうに愛し合はう。僕は奴隷にでも、犬にでもなる。たゞあの手紙だけは破いて、あすは立たないですむやうにしておくれ。それでなけりや僕は自殺する。』

『こゝに持つてゐるわ。お返へししやうと思つて持つて來たの。』と、微笑しながら言つて、手紙を出して引き裂いてしまつた。

アルマンは涙を流して、彼女の手に接吻した。恰度その時、ブルウダンスが居室に戻つて來た。

『ブルウダンス、アルマンさんが何か言つたか分つて』と、マルグリットは言つた。

『かんにんしてくれつていふんでせう。』

『さうよ。』

『で、かんにんしたの?』

『仕方がないわ。で、もうひとつ頼んだことがあるのよ。一緒に御飯がたべたいつて。』

『あなたは承知なすつたの?』

『どうしたらいいでせう。』

『二人とも赤ちやんね。ちつとも分らないんだもの、わたしもお腹が空いたから仲直りが出來たなら、何か食べに行きませう。』

『ぢや、行きませう、わたしの馬車は三人乗れるから』と言つて、マルグリットはアルマンの方を向いて、『メニヌはもうねてるでせうから、あなたが締りを開けるのよ。鍵を渡すからこんどはきつと失くさないやうになさい。』と、注意した。

アルマンは、彼女が息苦しさうに喘ぐまで長い間接吻をした。

三人が出かけやうとすると、下男ジョゼブが入つて来て、『旦那さま、お荷物が出来ました。』と、さも満足けな顔をして言つた。

『すつかり?』

『はい。』

『さうかい。ぢやすまないけどみんな解ほどいておいてくれ。俺は立つのをやめたんだから。』

## 六

その翌る日から、アルマンとマルグリットの關係は、長い間戀人同志であつたやうに親密なものになつた。

毎朝のやうに、マルグリットは晝飯を一緒にしたいといふ手紙を寄越すので、アルマンは必ず出かけて行つた。晝飯は市内一流の料理屋か、田舎まで出かけて行つて食べるかするので、すいぶん費用がかゝつて、彼れの年收三千圓は三月ぐらゐでなくな

つてしまつた。彼れは今後の生活に不安を抱かすにゐられなくなつて、金を借りるか或は彼女と別れるか、いづれかの道を選ばなければならぬと思つた。しかし、別れることは死んでも出来なかつたので、五千圓の元を借りて、賭博をやり初めた。幸ひにも一萬圓近くの金を儲けた。だから彼女との贅澤な生活はなんの障害もなしにつゞけられて行つた。

しかし幾日か経つうちに、マルグリットの心は段々善い方へ變つて行つたので、従つて生活も改められて行つた。彼女はアルマンの眞心こめた看護に對して、感謝を表はすためか、彼れのいふことをよく聞くやうになつた。醫者に診察して貰ふと、健康を保つためには安靜させるより方法はないといふので、彼れは夜ねずに飲み食ひをする習慣をやめさせ、規則正しい食事をとらせるやうにした。彼女は夜遊びもあまりしなくなつた。

空が晴れた夕暮などには、シャンゼリゼの木蔭を二人は連れだつて歩いたりした。家に歸ると軽い夕飯をすまして、ピアノを弾いたりした。かつてしたことなかつた

讀書を彼女はするやうになつた。アルマンはその時、『マノン』はマルリグットの前に須く謙遜なるべし——アルマン・ヂュバルより。』と記して、マノン・レスコオといふ哀しい物語りの本を彼女に贈つたのである。

六週間斯んな風に生活をつゞけてゐる中に、G伯爵との手も切れたので、彼等の關係をかくさなくてはならぬのは、老公爵一人となつた。従つて彼等の身は自由になつて、同棲してゐるのも同じやうになつて來た。

毎年、田舎にゐる父と妹のもとへ歸らねばならぬ時がやつて來たが、アルマンは彼等を安心させるやうな手紙を出して置いて、歸らなかつた。

それは、空が青々と晴れたある朝であつた。

すやく／＼睡つてゐたマルグリットは、窓のカーテンの隙から洩れてくる麗らかな日の光に急に眼を覺まして、突然飛び起きた。

『あなた、なんといい青い好い空なんでせう。田舎はどんなに美しいか知れやしませんわ。田舎へ連れて行つて頂戴な。』

彼女はカーテンを上げて、青空を視詰めながら言つた。

『よし／＼連れて行つて上げやう。』

アルマンはすぐ承知した。

すぐブルウダンスを迎へにやつた。彼女は田舎をよく知つてゐたし、それに彼女と一緒になら老公爵を安心させるからである。

ブルウダンスはやつて來ると、常より一層の快活さで、田舎の名物は、鶏卵、櫻桃ミルク、兎のステュウなどと呼び上げて大喜びであつた。

『あなたはほんとうに靜かな田舎の景色が見たいの？』と、ブルウダンスはマルグリットに訊いた。

『さうよ。』と、彼女は答へた。

『ぢや、ブウジヴァルへ行きませう。アルノウルの後家さんがやつてゐる曙館がいゝわ。アルマンさん馬車を雇つて頂戴。』

一時間も馬車に揺られてから、彼等はアルノウの後家さんの家に到着した。

彼等はホテルの中へ入つてひと休みする前に四邊の勝れた景色を一目に眺められるやうになつてゐる廣い庭園にある小山へ登つて行つた。

アルマンも、マルグリットも、巴里では見ることの出来ない、美しい自然に、靈を奪はれたやうにじつと見入つた。左の方はマレエの疏水が地半線を限つてゐた。右手には高低のある丘が、遠く遠く連つてゐた。漣さへ見えない一條の河が、白い絹のリボンを延ばしたやうに、ガビリオンの平原と、クロアツシーの島との間を流れてゐた。河岸には白楊がずつと植つてゐた。それは幽かに揺れてゐるやうに見えた。遙かかなたに、巴里の街は霧の中にほんやりと見えてゐる。

二人は大自然の恵み深いふところに包まれたやうに、お互ひに限りない幸福を感じ合つてゐた。

やがて彼等はホテルの食堂に勞れた足をやすめて、田舎料理に舌鼓を打つた。

アルノウル夫人にすゝめられて、晝過ぎから三人は舟遊びをすることにした。

裏木戸から、少し低くなつてゐる河岸へ下りて行つた、河岸に小型のボートが繋い

であつた。三人はそれに乗つて、河岸を下つて行つた。アルマンと、ブルウダンスが櫂を漕いだ。少しばかり河下へ來た頃、ボートを岸に繋いで、丘に上つた。

その邊は一面柔らかな芝生であつた。所々に濃い青葉の茂つた樹木が立つてゐた。

マルグリットは嬉しさうに、柔らかい芝生に可愛い足を投げ出して坐つた。アルマンは彼女の膝下に横になつた。彼れはいま初めて美しい彼女を見たかのやうに、つくづくと見入つた。眞夏の海のやうに青い空、甘い酔はずやうな草花の香、清い軟かな風、森と野のさみしい姿——かうした自然の中に、初めて彼女は清く美しくされたのであらう。いつも彼れの心を惱ます嫉妬は、知らなかつたことのやうに消えて、思ふまゝ戀することが出來た。

彼れはじつと眼を閉ぢて、楽しい想ひに浸つてゐるが、不思議にもうと／＼と夢に落ちて行つた。美しい花のやうな少女が彼の眼の前に現はれた。それは彼れが戀してゐるマルグリット・ゴオチエなのである。過去は凡て消え失せて、幸福な將來が展けてゐる。太陽は純眞な花嫁を照すやうに、戀人の上にかゝつてゐた。白衣をまどつた

女神のやうに美しい戀人は彼れの胸に縋つて、さみしい野原をさまよつて行く。

『あなたあの家はなんていゝんでせう。』と、マルグリットが大きく叫んだ聲に、アルマンは思はず我に歸つて、彼女の手を固く握りしめた。彼れは彼女が指さす方へ眼をやつた。

それは河岸に立つてゐる小さな二階家で、半圓形の桓根に圍まれ、桓根の間から、天鵞絨のやうに柔らかさうな青々とした芝生が擴つてゐるのが見える。蔦の葉が玄關から二階の窓まで絡んでゐる。人が住んでゐるやうに見えない。家の裏手に小さな杉の森があつた。

アルマンはいま見た夢の場面を、容れるには寔にふさはしい場所だと思つた。と、二人がここに住んで、晝のうちにはしづかな森の中を逍遙ひ、夜は柔らかな芝生の上に遊んでゐる場面が、繪のやうに明かに描き出されて來るのであつた。

なんとといふ幸福な生活であらう。もう直にさうした場面が現はれるやうに思はれた。『ほんとうに閑靜な好い家だわ。マルグリットさんあの家が氣に入つたの?』と、ブル

ウダンスが大きい聲で言つた。

『わたし好きだわ。あなたはどう思ひになつて。』と、アルマンの顔を見て言つた。

『うむ、結構だね。』

『ぢやわたしが運びをつけるわ。』

三人は立ち上つて家を見に入つた。家賃年千圓といふ貼紙がしてあつたので、たしかに空家に違ひなかつた。

『あなたこの家好き?』と、彼女はまたアルマンに訊ねた。

『僕が氣に入つたつて、こゝへ來られるかどうか分らないぢやないか。』

『あなたのためでなくつて、なんで田舎なんかへ燻りに來るもんですかよ。』

『ぢや僕がおまへのために借りるとしやうか。』

『あなたどうかしてゐらつしやるのね。そんなことは無駄ですわ。わたしのためにそんなことをしてくれる人は一人しかないので知つてゐるくせに。坊ちゃんはわたしに任せておけば好いのよ。』と、彼女は戒めるやうに言つた。



「さうなつたらわたしみんな遊びに来ませう。」

ブルダンスは自分の別荘でも貸りるやうに喜んでゐた。

夕暮れに三人は巴里へ歸つて来た。

マルグリットの家の前で、彼女を馬車からおろした頃には、アルマンは先刻さつきの彼女の計畫をもうさのみ氣にかけてゐなかつた。

## 七

翌朝、公爵がやつて來るといふので、アルマンはいつになく早く家に歸つた。出かけにマルグリットは、晩には必ず會ふからと言つたので、心待ちに待つてゐると、一通の手紙が彼女から届いた。

「わたしはこれから公爵と一緒にブウシヴァルへ行きます。今夜八時ブルウダンスの家で待つていらつしやい。」と、書いてあつた。

アルマンは二時間も早くから行つて、ブルウダンスの家で待つてゐると、約束のき

ツかり八時に、彼女はやつて来た。

「すつかりきまつてよ。いつでも引越せるのよ。」と、室内へ入りながら、彼女は嬉しさうに言つた。

「それやよかつたわね。」と、ブルウダンスも嬉しさうに言つた。

アルマンだけは公爵を欺くのかと思ふと、進んで氣乗りがしなかつた。

「アルマンさまのお部屋までちやんと探して來たのよ。」

「同じ家の中で？」と、ブルウダンスは眼を圓くして訊ねた。

「いゝえ、曙館だよ。公爵とあそこで御晝食をしたの。お神さんのアルノウルに好い部屋があるかと訊いて見たら、好いあんばいに居間と次の間と寢室のついた部屋が空いてゐるつていふんでせう。公爵が景色を見てゐる間に、わたしは室を見に入つたのせいのゝするやうな好い室よ。わたし借りつといたわ。アルマンさんいいでせう。家賃は月二十四圓よ。安いでせう。」

「あゝ結構。」

アルマンは飽くまでも自分のことを心配してくれる彼女の心持ちに感謝せずには居られなかつた。彼れは彼女をしつかりと抱いた。

『あの家はたしかに住み心地のいゝ家よ。裏口の方の鍵はあなたに上げるわ。表の方のは公爵に上げると約束はしたけれど、あの人は晝の中來るんだから持つて行かないでせう。わたしが巴里を去れば、公爵も家のものから苦情が出なくなるんで却て喜ぶでせうよ。でもあんなに好きだつた巴里からどうして田舎へなんぞ引越すんだつて、あの人は不思議がつてゐましたよ。身體を保養をしたいからだつて言つたらあの人は信じないやうでした。相變らず疑ひ深いんだから、アルマンさん氣をつけなくつては駄目よ。またきつと見張りをおくから。わたし家を借りて貰ふばかりでなく、借金を拂つて貰ひたいの。あなたそれで構はない？』

『いゝとも。』と、答へてしまつたが、彼女が公爵を欺すやうなことをするのが、たまらないほど嫌であつたが、その場はやつと情を抑へた。

『あなたは幸福よ。支度には金満家がついてゐるんだから。』と、彼女は言つて、アル

マンを抱いた。

『いつ引ッ越すの？』

『なるだけ早く。馬車も持つて行くの。召使ひも連れて行くの。ブルウダンスさん、家の番は頼みますよ。』

『えゝ、よこんさんすとも。そのかはり時々遊びに行きますよ。』と、ブルウダンスは言つた。

その夜は二人とも、別々の道へ歸つて行つた。

それから八日目の天氣の好い日に、マルグリットは、ブウジヴァルの家に引ッ越した。アルマンも曙館へ泊るやうになつた。

田舎の家に引き移つて來た最初の日から、マルグリットは過去の悪い習慣から、やつぱり逃れることは出来なかつた。

家は始終明けつばなして、毎日のやうに女の客が絶え間なく出入してゐた。一ヶ月の中に八九人宛のお客と一緒に、食事をしない日はたゞの一日もなかつた。その上に

ブルウダンスは知り合ひの人を幾人も引つぱつて来て、自分の家のやうな饗應をするのであつた。

この費用は全部公爵の懐から出るものであつたが、それでも不足だつたと見えて、マルグリットの使ひだからと言つて、ブルウダンスがアルマンの許へ金を受取りに来るのである。額はいつも四五百圓くらゐであつた。

が、マルグリットは、アルマンにまで無心をしなければならぬのは、すまないと思つたのか、少しづつやめるやうになつて行つた。でも一日二日静かな生活を送つてゐるかと思ふと、また澤山の男女がやつて来て大騒ぎをやつた。斯んな風だからあの公爵もぶつくり來なくなつてしまつた。公爵が來なくなつたのには理由があつた。ある日、公爵が彼女と一緒に晝飯をしようと思つて食堂へ入つて來ると、そこにはまだ十二三人の男女がゐて、朝飯の最中だつたので、彼等は公爵の入つて來たのを見るよどつと笑つた。公爵はそんなことは少しも知らずに、吃驚して逃げ出したので、彼等はまたどつと笑つた。

マルグリットは周章て、食卓<sup>テーブル</sup>を離れ、次の間にゐる公爵の傍へ行つて、あらん限りの言葉をつくして公爵を慰め、どうかしていまのことを忘れさせようと努めたが、ひどく憤つてしまつて、自分の家で俺に侮蔑を加へる者があるのを、黙つて見てゐるやうな女に、馬鹿遊びをさせておくために大金を拂ふことは出來ないと、彼女を叱りつけて、そのまゝ歸つてしまつた。

その日から、公爵からなんの便りもなくなつてしまつた。マルグリットは客を遠ざけて、生活をすつかり變へてしまつたが、やつぱり公爵はもう姿を見せなかつた。

しかしこの事件があつたために、マルグリットは以前よりも多く、アルマンのものになつた。彼れが長い間抱いてゐた夢が實現したのである。彼女はアルマンなしにはもう生きてゐられなくなつた。彼女は將來のことなどは少しも心配せず、二人の關係を表向きにした。いつか召使ひまでが、彼れを旦那さまと呼ぶやうになつた。

かうした二人の生活をブルウダンスは大變非難して、いろ／＼と彼女に意見をしたが、愛するアルマンとの幸福な生活を捨てるなら自分は生きてゐられない。自分のや

ることに不服な人はこの家に入出入しないでくれと言つたので、さすがのブルウダンスもそれ以上いふことは出来なかつた。

ある日またブルウダンスが訪ねて来た。丁度その時、アルマンは庭に出てゐたので彼女は彼れに気がつかないやうであつた。彼女は何か重大な用でもあるやうな容子でマルグリットを應接室に呼んだ。

アルマンはそつと應接室の前に忍んで行つて、堅く閉め切つた扉に耳を寄せた。

『どうして?』と、先づ初めにマルグリットが口を切つたやうであつた。

『公爵に會つてよ。先達つてのことはなんでもないから喜んで許してやるつて。だがアルマン・ヂュヴァルといふ男と大びらに暮してゐるのは許せないつてさ。男と別れさへすればまた以前のやうに仕送りをしてやるから、切れるやうに言つてくれつて、わたしに頼みましたよ。なんならわたしからアルマンに話して見ませうか。』

マルグリットは暫くの間、何んにもいはずに考へてゐるやうだつたので、彼女が答へるまで、アルマンは身を震はしながらじつと耳をすましてゐた。

『そんなことを言つても駄目よ。わたしはもうアルマンさんなしでは一時も生きてゐられないの。二人で暮してゐることを誰れにもかくさない。わたしはあの人を愛してゐるし、あの方はわたしを愛してゐる。一時間だつて離れてゐることはお互ひに出来ないのよ、それにわたしの生命はもう長くないんです。それだのにあんな老人の御機嫌を取らなくつちやならないんでせうか。公爵は後生大事にお金をしまつておくがい。わたしやお金なんか要らないわ。』

『だつてどうして生活して行くつもりなの?』

『そんなことはわたしに分れやしないさ。』

ブルウダンスが何かいはうとした時に、アルマンはもうじつと聞いてゐられなくなつて、突然、應接室へ飛び込んだのである。彼れはマルグリットの膝に身を投げかけて、あまりの嬉しさに彼女の手の上に熱い涙を注いだ。

『マルグリット、僕の生命はおまへのもんだ。公爵なんかの世話にならなくつてもいい。僕はその代りになる。決して見捨てたりしやあしない。もうだれにだつておまへ

の身體を束縛させやしないよ。僕だけのマルグリットだもの。僕等はお互ひに愛し合つてゐればそれでいいんだ。』

『さうよ。わたしはあなたを愛してゐます。わたしのアルマンさま!』と、彼女は激しく感動したやうに叫んで、アルマンの頸に抱きついた。

燃ゆるやうな接吻が彼れの頬に感じられた。

『アルマンさま、わたしはこれほどあなたを愛しやうとは夢にも思はなくつてよ。わたしたちは幸福にくらしませう。地味な生活をしませう。恥しい過去の生活はすっかり忘れてしまひます。だからあなたも昔のことはいいはないやうにしてくださいね。』と低い小聲で言つた。

アルマンは涙に咽ぶばかりで言葉もなかつた。たゞ彼れは彼女をしつかり抱きしめてゐた。

『ブルウダンスさん。歸つたらあなた見たまゝを公爵に話して、公爵にはもう用がないとわたしが言つたと傳へてください。』と、マルグリットは感情に熱した聲で言つ

た。

『でも未だ案じられますね。』と、ブルウダンスは言つて歸つて行つた。

この日から、家の者は公爵の名を呼ばなくなつてしまつた。

マルグリットの生活はすっかり變つてしまつた。彼女はどんな小さなことにでも氣を配つて、過去の悪い習慣を改めて行つた。ふしだらな今までの友だちと絶交し、言葉使ひまで改めた。もう前のやうに無駄づかひもしなくなつた。

どんな妻でも、これほどの愛を夫につくすことは出来ない、アルマンが思つほど彼女は心から彼れに従ふやうになつた。

二人は新しい端艇ボートを買つて、それで河岸を乗り廻はすことを、この上もない楽しみとした。大きな麥藁帽子を冠つて、レインコートを手にして舟遊びに行く彼女の姿は僅か四ヶ月前、贅澤と放埒の限りつくした巴里で有名な椿姫マルグリット・ゴオチエだとはだれも氣付かなかつたであらう。

彼女はもう二ヶ月も、巴里へ出かけて行かなかつた。時々訪ねて来る者は、アルウ

ダンスと、仲よしの友だちジュリー・デュプラア嬢であつた。

アルマンは日の長い一日、マルグリットの傍をはなれたことはなかつた。二人は庭園に面した窓を開けて、明るい夏の日光を避けながら、かつて二人が知らなかつた、眞實の生活を味はつたのであつた。

マルグリットは、ほんとに少女のやうな可愛い無邪氣さを持つてゐた。彼女は十歳位の女の兒のやうに、蝶や、蜻蛉の後を追ひかけたりするのである。

彼女が生きて行くのになくはならないやうな椿の花は、以前にはたいへんお金を出して買つてゐたのであるが、いまではもう決して買ふやうなことはしなかつた。彼女は草の上に立つて、一時間ぐらゐも、庭に咲いてゐる椿の花を見てゐることがあつた。

かうした楽しい幸福な生活をつゞけてゐながら、二人はその幸福が、あまりに短くはありはしないかと、お互ひにさみしい氣持ちを抱くこともあつた。しかし、晴々とした朝が來て、相抱擁し合つた時には、さうしたさみしさも忘れてしまつて、ある限

りの幸福に浸つてゐたのであつた。

彼女は「マノン・レスコオ」の悲しい物語を、熱心に讀み耽つては、女がほんとうに男を戀したなら、マノンのやうなことは出來ないと、始終、アルマンに言つてゐた。

暫く音信不通であつた公爵は、また時々マルグリットの元へ手紙を寄越すやうになつた。彼女は手紙を受取ると、いつもそのままアルマンに渡した。

アルマンは手紙を開いて、こんどはどんな條件づきでもよいから、今まで通り逢つてくれと書いてあつたりするのを見ると、彼れは氣の毒にも思つたが、彼女には何んにも話さずに、手紙は裂いて捨てしまつた。

しかし公爵も遂々手紙を寄越さなくなつてしまつた。

二人はなんの煩ひもなく、楽しい密のやうな戀をつゞけて行つた。

## 八

西の空が紅く彩られて、四邊の眺めがほんやり霞んで來た頃、二人は隠れ家の裏の

丘にある森の中を逍遙ふのを常としてゐた。二人は森の中の青い草を敷いて、抱き合つたまゝ、静寂の中に、夜を明かすこともある。

また或る時は、一日床を離れずにいることがあつた。二人の部屋を開ける特権を持つてゐるのは、ナニヌ一人だけで、彼女は起しもしないで、食物だけを運んで來るのである。食事をすますと、二人はまたねむるのである。丁度水潜りが呼吸をしに水面に浮び上るやうに浮び上つて、また戀の底深く沈んで行くのであつた。

かうした生活をつゞけてゐる中に、なぜかある時には、マルグリットの顔に、さみしい影がうかがはれた。美しい瞳に涙さへ光つてゐることがある。

『マルグリット、どうしてそんなに悲しい顔をしてゐるの？』

ある時、アルマンは彼女の手を固く握りながら、思ひ切つて訊ねて見た。

『わたしたちの戀は世間にある普通の方々の戀とは違つてゐますもの。ね、アルマンさま、あなたはわたしを處女のやうに思つて愛して下さるけれど、いつかはわたしの過去の罪をお責めになるやうになりはしないでせうか。さうなればお見捨てになると

思つて、わたし心細くつてたまりませんの。あなたお願いですから見捨てないつて誓つて下さいな。』

かう言つて彼女はアルマンの胸に縋つてさめぐと泣き入るのであつた。

『大丈夫きつと誓ふよ。そんな心配をしちやいけないよ。』

アルマンはかう言つて、震へてゐる彼女の背を、いつまでも撫でてやるのであつた。

夏はいつのまにか過ぎて、もう秋も深い頃となつた。ブヴジヴァルの隠れ家は一層静かにさみしくなつた來た。ある夕暮れ、二人はバルコニーに凭りかゝつて、外の景色を眺めてゐた。樹立を渡る激しい風の音は、哀しい歌のやうに流れてゐた。二人は手を握り合つたまゝ、長い沈黙に落ちてゐた。

『もう冬が來ますのね。どつかへ出かけませうか。』と、マルグリットが言つた。

『どこへ行きたいの？』

『伊大利あたりへ。』

『ぢや、おまへこゝが倦きちやつたの。』

『わたしね、冬が怖いのだよ。それにあなたが巴里へお歸りになるのが恐ろしいのだよ。』

『なぜ恐ろしいの？』

『いろんな理由がありますのよ。』と言つたきり、その理由は言はないで、『ねえ、いらつしやらない。わたし持ちものはみんな賣つてしまひますわ。そのお金で伊太利へ行きませうよ。さうすれや、誰だつてわたしが何者か知れやしませんわ。あなたはさうなりたくなくつて？』

『行かう、おまへが行きたいつていふ所なら、どこへでも僕は行くよ。でも持物なんか賣つてしまつたら歸つて來てから困るぢやないか。半年ぐらゐる旅をする金は僕も持つてゐるから、おまへさへよけれや、すぐ出かけやうぢやないか。』

『いけませんわ。』と、彼女は驚いたやうに言つて窓際から離れて、室内の隅に置かれたソファ―に腰をかけた。

『旅行してまであなたにお金を使はせられませんわ。こゝにゐたつても、するぶんあ

なたに御迷惑をかけてゐるんですものね。』

『マルゲリット、それは愚痴といふもんだよ。なぜおまへはそんなに氣が小さいの？』

『かんにして頂戴ね、あなた斯んな荒模様の日が神経に障るんですよ。なんだかさみしくなつて、いふつもりでもないことを、言つてしまひましたの。』

かう言つて彼女は、アルマンの胸に縋つたが、やがてまた、深い物思ひに沈んで行つた。

かうしたことは屢々あつた。そのたんびにアルマンはいろくくと彼女を慰めて、理由を尋ねるのであつたが、彼女はどうしても話さなかつた。きつと單調な生活に飽きたのではないかとアルマンは思つて、巴里へ歸ることを勧めて見たが、田舎にゐるほど楽しいことはない、いつも言ひ張るのであつた。

ブルウダンスは時々訪ねて來た。手紙は始終寄越した。折々彼女の手紙はマルグリットを深い物思ひに落とし込むやうであつた。アルマンにはその理由が想像出來なかつ



た。

秋晴れの好い天気の日であつた。マルグリットは、ボートでクロアシーの島へ遊びに行かうといふので、アルマンは一緒に出かけて行つた。その日に限つて、彼女は非常に楽しさうに見えた。五時頃家に歸つて來た。

『ブルウダンスさんがおいでになつて奥さんの馬車でお歸りになりましたよ。』と、ナイヌが言つた。

ブルウダンスが馬車で歸つたことを、マルグリットは別に氣に止めてゐなかつた。

それから二日目に、ブルウダンスから手紙が彼女のところへ着いた。その手紙を見たゝめか、二週間以來、ちつちもわけを話さないで鬱いでばかりゐた彼女は、不思議なほど快活になつて來た。

それから幾日経つても、馬車は歸つて來なかつたので、アルマンは不審を抱かすにはゐられなかつた。

『ブルウダンスはなぜおまへの馬車を返してよこさないんだらう。』と、ある日、アルマンは訊いて見た。

『馬が一匹病氣になつたんです。それに田舎にゐて必要のないうちに、馬車も修繕しておく方が巴里に歸つた時すぐ間に合ひますからね。』と、彼女はなんでもないといふやうにいふのであつた。

アルマンもそれ以上突つ込で聞くことはやめてしまつた。

それから四五日して、またブルウダンスがやつて來た。彼女は歸りがけに、マルグリットの肩掛を借りて歸つた。

また一ヶ月過ぎた。その間マルグリットは以前より一層楽しさうに見えた。アルマンに對しても、もつと情愛ぶかくなつた。

しかし、いくら経つても、ブルウダンスは馬車も肩掛も返へしに來なかつた。アルマンは氣がかりでたまらなくなつたので、彼女の寶石箱を探して見ると、たくさんあつた寶石類はたゞ一つも見當らない。彼は吃驚して寶石の空箱を見てゐたが、不満

を抱かすにはゐられなかつた。が、事情を聞いたとて、マルグリットは、打ち明ける筈はないと思つたので、彼れはブルウダンスの所へ行くことに心を決めた。

事務所へ田舎から手紙が來てゐるかも知れないからといふ口實で、彼れはある日巴里へ出かけて行つた。

彼れはすぐブルウダンスを訪ねた。訊いて見ると、馬車も、肩掛も、ダイヤもみんな賣拂つてしまつたことが判つた。それに一萬二千圓の借金まであることが知れた。彼れはかなり驚きもしたが、マルグリットがしみじみ可哀想にもなつた。

ブルウダンスはほつ／＼おしやべりを始めた。

『道具屋が公爵の家へ行つたらあの女とは無關係だからと言つて、支拂ふ筈になつてゐたのを拂はないんですつて。こつちへやかましく言つてくるから、あなたからの千二百圓を内金に拂つてすましたんですが、道具屋の奴がマルグリットは公爵に捨てられたつて言ひふらしたもんだから、借金取がどん／＼詰めかけて、差押へるつていふんでせう。だから馬車も肩掛も賣つたんですよ。』と、證書を見せてから『あなたいつ

ぞや言つたやうな時が來たでせう。あなたは田舎で夢のやうな戀をして、それでいゝと思つてゐるでせうが、粹な生活の裏にはやつぱり金があるもので、美しい戀の世界は絹絲どころか、鐵の鎖がつないでゐるんですよ。あなたも少し考へておやんなさい。一萬二千圓なくつちや借金は抜けないでせう。』

『ぢや僕が出さう。』

『そんなことをしたらお父さんとの間はもめる。財産はなくなる。しまひに後悔する時が來ますよ。だからやつぱり伯の手にでもあの女を任してさ。あなたは情夫のつもりでゐればいいんですよ。もう五六ヶ月も同棲したんだから巴里へ歸してさ。冬の間はつゝましくしておいて、夏になつたらまた始めたらいゝぢやありませんか。』

ブルウダンスのいふことは、無殘にも眞理に近いので、アルマンはそれ以上聞くことは苦痛であつた。

『ぢや、一萬二千圓は間違ひなく僕が支拂ふからね。マルグリットに何か賣るやうに頼まれても賣らないやうにしでおくれ。』

アルマンはかう頼んでおいて、ブルウダンスの家を出た。

彼れは歸りがけに、若しかすると田舎の父親から、事務所の方へ手紙が來てゐるかも知れないと思つて寄つて見た。思つたとほり四通も手紙が來てゐた。三通は返事がないので心配してゐるといふので、後の一通は彼れの生活を知つて、近く巴里へ訪ねるといふのである。田舎の町で、稅務監督局長を務めてゐる人格の高い父に對しては彼れは非常な尊敬と愛情とを有つてゐたので、すぐ返事を書く氣持ちになつた。

返事が遅くなつたのは、しばらく旅行してゐたからで、巴里へ來られるなら、前以て知らして戴きたい。さうすればどんな忙しい用事があつても、繰り合せて會ふからと書いてやつた。

國から手紙が來たら轉送するやうに下男に頼んでおいて、彼れはすぐブウジヴァルへ歸つて行つた。

マルグリットは門の所へ出て、アルマンの歸るのを待つてゐた。

彼女の顔は青ざめて、ひどく不安が漂つてゐた。彼女はアルマンの胸にとり縋るな

り、「あなたはブルウダンスにお會ひになつたでせう。」と、訊かずにゐられないといふやうに言つた。

「いゝや。」と、アルマンは知らぬ顔で答へた。

「ずいぶん時間がかゝつたわね。」

「お父さんから手紙がたくさん來てゐて、その返事を書いてゐたんで遅くなつたんだよ。」

「あなた何故、そんなにうそをおつきになるの、あなたはブルウダンスにお會ひなつたぢやありませんか。」

「だれがそんなことをいつたい？」

「メニエよ。あなたの後をつけて行つたんです。」

「ぢや、おまへがつけさしたんだね。」

「えゝさうよ。四ヶ月の間一度もわたしの傍から離れなかつたあなたが急に巴里へ行くなんてなんか理由があるに違ひないと思つたのよ。他の女のところへでも行くとい

けないと思つて。」

「驚いたね、嫉妬はこの頃おまへの方が上手だね。」

アルマンはかう言つて父からの手紙を見せた。

「訊いてゐるのはそれぢやなくつてよ。あなたはなんだつてブルウダンスの處へ行つたの。」

「たゞついでに會ひに行つたのさ。」

「また嘘をおいひになる。」

「實は馬の病氣は好い方か、肩掛や寶石はまだあるか訊いてきたんだよ。」

マルグリットは急に顔色を變へて、しばらく黙つてゐた。

「それであなたお怒りになつたの。」と、彼女は不安さうに言つた。

「怒つてゐるさ。だつておまへは金が要つても言つてくれなんだもの。」

「わたしはあなたを愛してゐますから、なるべくお金なんか出してたゞきたくないの。あなたはわたしたちのやうな女の戀は、どんなに心細いものかを御存じないの。」

ね。飽きておしまいになつて他へ行つてしまつた時、この戀は手管仕事かとお思ひになるかも知れませんが、馬がゐるなくつても、肩掛やダイヤがなくつても、同じやうに可愛がつてくださればいゝのよ。」

飽くまでも眞面目な氣持ちである彼女の心を思ふと、アルマンは思はず涙ぐんでしまつた。彼れはやさしく彼女の手をとりながら、

「おまへがそんなに僕を思つてゐてくれるのは嬉しいが、若しおまへが金がなくなると飽きてしまつたとした場合、他の男と住んでゐたらこんなにならなかつたらうと、一寸でも思はれるのがいやだよ。二三日したら馬車もダイヤも肩掛も、みんな返つて来る。空氣が生物に必要なやうに、おまへにはこんなものが大切です。やつぱり華やかな方がおまへは好いやうだ。」

「あなたはわたしがお嫌やになつたの。ほんとにわたしを思つてくださるなら、わたしの思ふとほりにしてくだすつてもいゝぢやないの、なんでもわたしを贅澤屋ときめて、お金を使はなくつてならないやうに思つてゐるね。わたしをお捨てになるつもり

なんでせう。別れた時慾得を離れた戀だといはうと思つて。』

『いやおまへを幸福に、なんの不足がないやうにしてやらうと思つてさ。』

『さうとは思へませんわ。なぜならわたしが身分相應の生活をしやうと思つてゐるのに、却て前の生活に歸らさうとなさつてゐるんですもの。じみちに堅くさへ暮して行けば、立派にやつて行かれるのに、一時にバツとやつてしまつて、後は無一文にならうとおつしやるんですもの。いくらわたしのやうな馬鹿者だつて、あなたと、馬やダイヤと較べものに出來ますか。本當に戀を知つたからこそ、ダイヤも何もかも要らなくなつたんです。あなたが財産をなくして私にお手當を下さつたつて、二三ヶ月でなくなつてしまひます。今ならあなたは年收四千圓もあるんだし、わたしだつて不用な品物を賣れば年八百圓ぐらゐなお金は入るから、それで小さな家を借りて住めば立派に生活してゆかれます。さうすればあなただつて獨立して氣兼ねはなし、わたしだつて自由になれるぢやありませんか。どうぞ二度と前の生活におとさないでください。』

かう言はれると、愛と感謝の涙が瀧のやうに流れ出して、アルマンは返事をするこ

とさへ出來なかつた。彼れは彼女の手を強く握りしめた。

『なんにもあなたはいはないうちに、すつかり仕事をやつてしまふつもりでしたの。ねえあなた賛成してくださる。わたしを可愛がつてくださること?』

それほど眞心からの彼女のやりかたに、それ以上反對することは、アルマンには出來なかつた。

『おまへのいふことなら、なんでもはいくときますよ。』とアルマンは言つた。

彼女の計畫どほりにするときはまると、マルグリットはまるで子供のやうに、歌つたり、踊つたりして喜んだ。彼女は家のことばかり話した。

アルマンは、一齊の解決を限りなく喜んでゐるマルグリットの容子を見ると、ほんとうに嬉しかつた。もう二人は永久に離れることはないといふ確信を、彼れは初めて抱いた。同時に一生の方針をきめた。母親から譲られた財産は全部マルグリットの名義に換へることにした。が、それは彼女に言はなかつた。彼女が拒むにきまつてゐるから。その手続きだけは知人である公證人に頼んだ。

その翌日から、二人は二三日つゞけて巴里へ貸家を探しに行つた。市の端れではあつたが、二人が住むのには都合のいゝ家があつた。早速その家を借りることにした。もう一つ好都合なことは、借金のある家具屋が、全部器具を渡すなら、代金は棒引にして八千圓だけ拂はうといふのであつた。なんでもが障害もなく、樂々と運んで行つたのが、二人はどんなに喜んだか知れなかつた。將來の幸福な話ばかりで持ちきつてゐた。

## 九

一週間経つて、翌日巴里へ引越しをすることにきめた朝のことであつた。丁度朝飯を食べてゐる時、下男のジョゼブが巴里からやつて来て、父親が巴里についたから、すぐ歸るやうにと知らせに來た。

その知らせは別に不思議なことでもなかつたが、アルマンは思はずマルグリットと顔を見合せた。何か恐ろしい不幸が、やつて來たやうに、二人は同時に感じ合つた。

『なんでもないよ。心配なんかするんぢやないよ。』と、アルマンは彼女の手を取つて言つた。

『ではね、出来るだけ早く歸つて来て頂戴ね、わたし窓に出て待つてゐるわよ。』と、彼女はさみしさうな顔をして言つた。

『うむ早く歸るよ。』

アルマンは間もなく出かけて行つた。彼れがプロヴァンスの家に歸つたのは、それから二時間ほど後であつた。

扉を開けて室内へ入つて行つて見ると、父親は質素なふだん着を着て、机に向つて手紙を書いてゐた。足音にすぐ彼れは振り回つて、アルマンの方をジツと見たが、父の眼色は恐ろしく險悪を見せてゐたので、これは容易ならぬ事を持ち出されるなど、アルマンは思つた。だが、彼れは努めて平氣な顔をして、父の傍へ寄つた。

『お父さま、いつ頃お着きでした。』と、アルマンは訊いた。

『昨夜ついたんだ。』

『いつものやうにまつすぐこゝへいらつしたんですか。』

『さうだ。』と、父親は如何にも不機嫌な言ひ方をする。

彼れは黙つてまた手紙を書きつけかけてゐるが、書き終へると、それを封筒に入れて下男に出しにやつた。

それから父親は、アルマンの方に向き直つて、口を切つた。

『おまへはマルグリットといふ女と同棲してゐるさうだが、事實だらうな。おまへはその女がどういふ種類の女か知つてゐるのか。』と、恐ろしく眉の間に皺を寄せて言つた。

『勿論、その女がなんであるか知つて同棲してゐるんです。』と、アルマンはきつぱり答へた。

『おまへがわたしや妹の所へ逢ひに来るのを怠つたのはその女のためだね。その女をよほど愛してゐるのか。』

『その女の爲めに義務を缺つひいだくらるんですからお分りでせう。』

アルマンは自分でも不思議に思ふくらゐ大膽に答へた。

『いつまでそんな生活が出来るとおまへは思つてゐるのか。わしは絶體に許しはしないぞ。』と、怒りを帯びた聲で言つた。

『わたしはあなたの名や先祖家名を潰さない限り、彼女との生活にあなたの干渉を受ける必要はありません。あの女と別れるくらゐなら死んだ方がよいと思つてゐるくらゐです。』

アルマンはマルグリットのためだと思ふと、父との争論をなんとも思はなかつた。

「情婦を持つのも結構ぢや、だがおまへは情婦に對して、紳士的な態度を失つてゐる。遠い田舎までよくない噂が傳つてゐる。それで家名を傷つけぬといへるか。言語同斷ぢや。』

『あなたは誤解してゐられます。わたしはマルグリット・ゴオチエにあなたから頂戴した家名を與へた覚えはありません。』

『アルマンおまへはよく考へるがよい。ほんとうの愛情といふものは純潔な婦人にな

くではあるもんぢやない。おまへがこれ以上深入りするならば必ず不幸になるにきまつてゐる。わしはみす／＼俸を邪道に落したくない。無理にも別れさせる。」

『そんな無理なことおつしやつても駄目です。あの女なしにわたしは生きて行かれません。』と言つて、アルマンは黙つてしまつた。

父は言葉をつげた。

『おまへは娼婦を一生妻にするつもりか。馬鹿なことをいはずに女と別れなさい。もうおまへも、二十四歳といふ年ではないか。少しは將來のことを考へてくれ。田舎へ歸つて静かな家庭にゐれば、熱が冷めて、女の正體も分つて来る、さあわしのいふとほり一緒に歸れ。』

かう言つて、しつこくアルマンに詰め寄つた。

『わたしは歸りません。あなたはあの女を御存知ないから、わたしを邪道に陥入れるやうに考へるんですが、あの女はまたとない立派な心持ちを持つてゐる女です。わたしはあの女のために、正しい道へ導れてゐるくらゐです。』

『そんな正しい女がおまへの財産二萬二千圓を奪はうとするのか。』

『それはわたし一個の考へで、女は知りやしません。わたしはすいぶん女に犠牲を拂はせてもゐます。それに報ひるためです。』

『なに女に犠牲を拂はせたと、そんな破廉耻なことをもう一時もさせてをけない。さあわしと一緒に歸れ。』

『わたしはいつまでも子供ぢやありません。絶対服従は出来ません。』と、アルマンは思ひ切つて呶鳴るやうに言つた。

父は顔色を蒼くして立ち上つた。そして下男を呼ぶと、自分の荷物をすぐバリ、ホテルへ運ぶやうに命じた。

アルマンは父親を表に送りして、『お父さんマルグリットを苦しめないで下さい。』と言つた。

『アルマンおまへは正氣を失つたと見えるね。』と蔑むやうに父は言つて、どん／＼行つてしまつた。



アルマンは一寸の間考へ込んでゐたが、なにか思ひついたやうに、急いで表へ飛び出した。

彼れはプウジヴァルへ馬車を急がした。

マルグリットは、先刻出がけに言つたやうに、アルマンの歸るのを、ちやんと待つてゐた。

『あらあなたはお顔が眞ッ蒼よ。どうなさいまして？』

かう言つて、彼女はアルマンの胸に縋つた。

彼れは父親との激しいいきさつに就いて、詳しく話した。

『多分そんなことだらうと思つてゐましたわ。ジョゼブがお父さまのお着きを知らせに來た時、不幸な知らせが來たやうに、わたしはぞつとしましたの。あなたを悲しませるもとはわたしの爲めなんだから、お父さまと喧嘩をなさらずに、わたしと切れた方がよいか知れませんか。でもわたしはあなたを愛するほかに、何ひとつ望むことはなしに、眞面目に暮してゐるんだけど、お父さまはこんなことを知つてはくださらな

いでせうね。あなた新らしい生活を始めるといふことをお話しくだすつて？』

『うむ話したんだよ。わたしたちそれほど愛し合つてゐることを却て親爺は憤つたんだ。』

『どうしたらいゝんでせうね。』と、マルグリットは震える聲で言つた。

『じつと堪へて嵐の通りすぎるのを待つてゐるんだね。』

『嵐はやむでせうか。』と、彼女は不安な顔色をして言つた。

『やむとも。』と、アルマンは力強く言ひ放つた。

『でもお父さんはこのまゝぢやおすましになりませんよ。親ツてものはどんな場合にも、子供を思ふやうにしやうとするんですから、わたしと別れさそうと思つて、きつとわたしの過去のことをおつしやりますわ。』

『どんなことをいつたつて、僕は耳に入れやしない。僕がおまへを愛してゐることは分つてゐるぢやないか。』

『それや解つてますわ。でもきつとあなたはお父さまのいふことに従ふやうになりま

すよ。』

『そんなことはないよ。僕はきつと父に諒解させるよ。』

『もうなんにもおつしやらないでください。あなたがお父さまとけんかをなさるのがわたしは何よりいやなのよ。今日はもう話はやめて、あした巴里に行つていらつしやい。お父さまも理解してくだすつて、圓滿に治まるかも知れませんよ。あなたはお氣を落さないでね。たとへどんなことがあつたつて、あなたのマルグリットは心變りはしませんから。』

『おまへはそれを誓つてくれるかい。』

アルマンはかう言つて、その話はそれで打ち切り、これからの楽しい生活に就いていろ／＼と話した。でも、なにか恐ろしい不幸が、少しづつ近づいて来るやうな不安を、二人とも感じ合つた。しかし、幸ひなにごとも起らずにその日は暮れて行つた。

十

翌る朝の十時頃、アルマンは家を出た。

マルグリットは窓に凭れて、アルマンの姿を見送つてゐたが、見えなくなつてしまふと、急に悲しくなつて、思はず寢臺の上に向つ伏してしまつた。アルマンがすままないでゐるのを、追ひ出すやうに、無理に巴里へやつたのが、ほんとにすまない氣持ちがした。

實は昨日アルマンの父から手紙が来て、是非二人だけでお話したいから、俵を外出さしておいてくれとの頼みだつたので、いつそアルマンにうち明けてしまはうとしたのであるが、それではあんまり卑怯だと思つたので、遂々いはずにしまつたのである。それに手紙の終りには、いつさいアルマンには秘密にしてくれと認めてあつたので、一層いはないことに心を決めたのであつた。

でも今日、いよ／＼彼れの父に會ふのだと思ふと、楽しい生活も、もう間もなく破られてしまひさうに思はれて、泣がずにはゐられなかつた。

晝近くになつて、アルマンの父が訪ねて來たと、メニイヌが知らせに來たので、應

接間に通させておいて、彼女はすぐ着物を着換へた。

やがて彼女は應接室に入つて行つた。

アルマンの父といふのは、六十歳近くの黒々とした顎髯を生やした、見るから厳めしい人であつた。彼女の丁寧な挨拶に對して、さけすむやうな無作法な態度に出た。

『おまへはなんだつてわしの息子のやうに純真な眞面目な青年を誘惑するんだ。そして大金を使はせるなんて怪しからん奴ぢや。』と、脅しつけるやうにどなつて、威張り返つた。

マルグリットは思はずむつとして、『わたしはあなたの息子さんのことを思へばこそかうしてお目にもかゝつてゐるんです。紳士なら紳士らしい態度でお話しなすつてください。わたしはアルマンさんに一度だつて無理なお金を出させたことはありませぬ。』と、言つて、質札や、家財を賣拂つた受取證などを見せて、これからは出来る限り生活費を縮めて、二人で世帯を持つことに心を決めたのであると、彼れが得心するやうによく話した。

アルマンの父はやうやく分つたと見えて、前の無體を詫びた。そしてこんどは急に丁寧な言葉使ひで、『これは小言でもなければ脅しでもありません。たゞさう心いつぱいの願ひですから、どうか俸のために、いまゞでつくして下さつたよりも、もつと大きな犠牲を拂つていたゞけませんか。』と、哀願するやうに言つて、彼女の傍へ寄つて手をとりながら、やさしい句調で話し始めた。

『わしのいふことを無理だ残酷だと思つてくださいますな。人間は一生情婦だけではすまされない。家庭のことなどは少しも考へない無分別な時代から、分別盛りの時代が、だれも来るものです。その時の用意に豫め相當な地位を作つておかねばならぬ。ところか俸は母親から遺されたわづかばかりの財産まで、あんたのために棒に振らうとしてゐる。それにあんたの世話ばかり受けてゐれば世間では俸を男妾のやうに評判するでせう。さうして暮してゐるうちに、あれにも分別時代がやつて来る。が、もうその時は遅すぎる。あれはもう世間に役立たない人間になつてゐる。あんたは年寄つて盛りは過ぎてしまふ。そしてこの親爺は折角孝行されやうと思つてゐたつた一

人の伴のために苦しまなければならぬ。あんたは年は若いし、美しくはあるし、どうにでも慰安を得られるでせう。それに感心な心意氣をお持ちなんだから、この親爺を助けると思つて、一つ善行をやつて下さい。さうすれば過去の罪業も消えませう。あんたと六ヶ月同棲してゐる間に、わしのことはずつかり忘れて、これほどわしが心配してゐるのに伴は知らぬ顔で逆上せ上つてゐるんです。』

かう言つて彼れは悲しさうに眼を瞬きながら、長々と言葉をつゞけて行つた。そして、どうか伴に對する證據を見せてくれ。それにはあんたの愛を犠牲にしなければならぬ——などと言つた。

それから彼はまた口を切つた。

『實はわたしには天使のやうな美しい娘が一人あるんです。その娘がこんどある名望家の息子と結婚することになつたところが、兄の不品行が改まらない限りは破談にするといふんです。娘はその青年と戀人同志です。一家の幸、不幸はあんたの手一つに握られてゐるんです。どうぞ娘の身を幸福にしてやつて、わたしを救つて下さい。』

かう心から打ちとけていはれると、マルグリットの心の中に、犠牲的な高尚な觀念が眼覺めて來て、たゞもう娘さんの幸福のためにと、アルマンとの楽しい所帯のことまで忘れて行くやうな氣持ちになつた。

『ではあなたさまは、わたしがアルマンさまをどんなにか愛してゐるといふことを御信じ下さいますか。』と、彼女は涙ながらに訊ねた。

『信じてゐますとも。』と、アルマンの父はきつぱり答へた。

『ではわたしがこの眞實の戀を一生の望みとして楽しみにしてゐたこともお判りですか。』

『よく判つてゐます。』

『では失禮ですが、あなたのお嬢さまに遊ばすと同じやうに、わたしをお抱き下さい。さうして清いキッスをいたゞけば、そのおかけで苦しい戀の惱みと闘ふことが出來やうと思ひます。アルマンさまはきつとお國へ歸すやうにいたします。』

『あんたは實に立派なお方だ。』と言つて、彼れはマルグリットの額に接吻した。

彼女はその場ですぐN伯爵の仰せに従ふから明晩會へるやうにと、ブルウダンスにあてゝ手紙を書いた。そして、その手紙を届けてくれるやうにと、アルマンの父に頼むと、用向きを訊くので、お子さんの幸福のためだといふと、彼れはもう一度彼女に接吻して、感謝の涙をはらくと流した。

アルマンの父が歸つてしまふと、マルグリットは急にぐつたりと弱つてしまつて、よろけるやうにしてやうやく寢室へ歩みを運んで行つた。そしてすつかり力を失つてしまつたやうな身體を、寢臺の上に投げ出した。

彼女は樂しかつた六ヶ月の生活を、夢とあきらめてしまつて、再びあの恐ろしい悪魔の世界へ、自ら進んで陥ちて行くことを決心したのであつた。

## 十一

アルマンは父親が泊つてゐる、バリ・ホテルで午後六時まで待つてゐたが、父は歸つて來なかつたので、暗くなつてから、疲れ切つてブアジヴァルへ歸つて來た。

いつも迎ひに出て來るマルグリットが、今夜に限つて出て來ないのを、不審に思つて、寢室へ入つて見ると、彼女は暖爐の傍へ寄つて、物思ひに沈んでゐるやうであつた。

彼れが傍へ近寄つたのを氣がつかないやうだつたので、彼れは突然、彼女の額に接吻をした。

彼女は睡りから覺めたやうに、吃驚して飛び上つた。

『あゝびつくりした。』と、彼女は顔にまで驚きの色を見せた。そしてすぐ、『お父さんにお會ひして?』と訊ねた。

『長い間ホテルでお待ちしたんだけど、遂々お會ひ出來なかつたのさ。心當りも方々探したんだけど、どこにもゐらつしやらないんだ。』

『ちや、明日お訪ねなさらなくつてはいけませんわ。』

『もう向ふから迎ひに來るまでは斷然行くまいと思つてゐるんだ。わたしはやるべきことはすつかりやつてしまつたつもりだもの。』

『いえ、まだ十分ぢやありません。明日是非行かなくてはいけません。』

『なぜ明日でなければいけないの？ 他の日だつていぢやないか。』

『だつてね、早く事を済まさなくつては……。』

彼女はなぜか顔を赤らめた。

それからアルマンが何を話しても、彼女はほんやりしてゐて、まるで判らないやうであつた。こんどの問題は決して心配しないやうに、いろ／＼慰めても、それさへ聞いてゐないやうであつた。

翌朝になると、アルマンは無理に急ぎ立てられて、家を出されてしまつた。

ホテルへ来て見ると、昨日と同じやうに父は留守で、『もし今日来たなら四時まで待つておいで。四時にわしが歸らなかつたら、明日来るがい。一緒に食事をするから』と書いてある置手紙がしてあつた。

彼れは午後四時まで空しく待つて、ブウチヅアルへ歸つた。

家に歸つて見ると、マルグリットは昨日と同じやうに鬱ぎ込んでゐた。それにけふ

は、ひどく昂奮してゐるやうで、いきなりアルマンの胸に縋ると泣き入つてしまつた。いくら理由を訊いても、わけの判らないことばかり答へてゐた。暫くすると、やつと氣が落ちついたやうに見えたので、アルマンは彼女の心を慰めるつもりで、けふの出勤のことや、父の手紙を見せたりして、この分では父は、自分たちの希ひを聞き入れてくれるだらうからと言つて聞かした。するとマルグリットは、前よりも一層激しく泣きだすのであつた。

アルマンはほと／＼困り果て、精神に異状でも來したのではないかと案じながら、彼女を抱いて寢室へ連れて行つて、寢臺にねかしたが、彼女は少しも落ちつかずに泣いてばかりゐた。そして彼れの手に縋つては、まるで氣が狂つたやうに、接吻をつけた。

アルマンは自分の留守中に、きつと誰れか訪ねて來たのか、或は手紙でも來て、彼女を悲しませる原因を作つたのであらうと思つた。彼れは女中のメニヌを呼んで訊いて見たが、彼女は知らないと言つた。しかし、きのふ以來彼女を不幸にするやうな

なにごとか不吉なことが起つたに違ひないと、アルマンは想像することが出来た。

夜になると、マルグリットは少しはよくなつたやうであつた。

アルマンは彼女の枕下へ椅子を置いて腰をかけてゐた。

『わたしあなたを愛してゐてよ。』と、彼女は幾度も繰り返へしてばかりゐた。

時々微笑を浮べて、彼れの方をじつと見てゐたが、眼には涙が光つてゐた。

アルマンはいろいろ苦心をして、悲哀の原因を探し出さうとしたが、なにを訊いても、彼女はわけの解らないことばかり言つてゐた。

彼女はいつかアルマンの手を握つたまゝ寝入つてしまつた。が、絶えず悪夢に襲はれてゐるやうに時々囁語を言つたり、苦しさうな叫び聲を上げたり、急に飛び起きたりした。夜明けになつてから、やうやく彼女は安らかな熟睡に落ちて行つた。

十一時頃になつて、マルグリットは眼をさました。自分の傍に腰かけてゐるアルマンの顔をじつと見た。

『あなたもお出かけ？』と、彼女は訊ねた。

『いつまでも静にねかして置かうと思つたら、もう眼をさましちやつたの、僕は四時頃でなくつちや出かけやしないよ。』

アルマンはかう言つて、彼女の手をしつかり握つた。

『こんなに早く、それまであなたはわたしの傍にゐてくださつて。』

『いつだつてさうぢやないか。』と、アルマンは言つた。

『あゝ嬉しい、御一緒に朝ごはんをいたゞきませうか。』

かう言ひながら起き上つた彼女の容子に、まるで靈のぬけた人のやうにほんやり見えた。

『あなた、お出かけになるまでわたしを可愛がつてくださるわね。今夜は歸つてゐらつしやるでせう。わたしたちは幸福だわね。』

彼女がいふことはまるで噂言のやうであつたが、そこには何か哀しい、恐ろしい事實がかくされてゐるやうに、アルマンには思はれた。

『マルグリット、おまへ病氣なんだ。僕はおまへを残して巴里へ行く氣にはなれな

い。お父さまに手紙を出して、今日はやめることにしやう。』

アルマンは彼女を抱くやうにして言つた。

『いゝえいけませんわ。お父さまが折角お待ちになつてゐるのに、おいでにならなかつたらお父さまは屹度わたしをお責めになります。心配なさらないうで頂戴、わたしは病氣ぢやないのよ。悪い夢を見たのが覺めずになりましたの。』

かう言つて彼女は努めて快活を粧はうとするやうに見た。そして、もう涙も見せなかつた。

巴里へ行かねばならぬ時刻が來ると、アルマンは出がけに停車場まで一緒に來るやうに言つたので、マルグリットはメニエヌを連れて一緒に來た。アルマンはいつまでゝも彼女と別れたくなかつたけれど、この上父を憤らすやうなことがあつては二人の生活を一層不安に思つたので、彼れは仕方がなく汽車に乗つた。

『ではこんばんね。』と、別れる時彼女に言つたが、なんの答へもなかつた。

ホテルへ行くと、父は不思議なほど機嫌よく彼れを迎へた。

アルマンはすぐ自分の生活に就いて父に尋ねた。

『世間の噂ほどのことはなかつたよ。だからわしはおまへを許してやらうと思つてゐる。おまへがマルグリットを戀人に持つたことは、却て仕合せであつたやうに思ふ。』といふ父親の言葉を聞くと、死から甦つたやうな喜びを感じた。そして一時も早くブウヂヴアルへ歸つて、このことをマルグリットに話して喜ばしてやらうと思ふと、この場に落ちついてゐられなかつた。父と一緒に夕飯をすますと、父が止めるも聞かずに彼れはホテルを飛び出して停車場へ急いだ。

## 十二

アルマンは汽車に乗つてからも、席にじつとしてゐられないほど、胸がわく／＼するのを感じた。それにいつも速い汽車が、今夜だけは遅いやうに思はれて、氣持ちは一層焦立つばかりであつた。走つてゐる汽車が急に止まつたやうに思つて、ブウヂヴアルではないかと、思はず立ち上つたりした。彼は絶えず、マルグリットの喜ぶ顔を



思ひ浮べてゐた。

汽車は十一時頃、ブウジヴァルのステーションに着いた。彼れはブラットホームを出ると、一目散に駈け出して行つた。

家の前まで来ると、不思議にも窓に見えるはずの燈火が、一つも輝いてゐない。家の中は元の空家に歸つたやうな静寂さである。

彼れはなにごとか起つたのではないかと、胸を激しく震はせながら、夢中になつて鈴を鳴らしつゞけた。やうやく門番が出て来て開けてくれた。家の中へ入ると、メニイヌが燭臺を持つて出て來た。

アルマンはいきなりマルグリットの室へ飛び込んで行つた。室内は薄暗く、片づけられたやうで、彼女がゐたやうな氣配は少しもないやうな感じがした。

『奥さまはどうした?』と、彼れは急ぎ込んで訊ねた。

『巴里へお出かけになりました。』と。平氣でメニイヌは答へた。

『いつ頃?』

『あなたさまがお出かけになりました。一時間ばかり後でございました。』

『わたしになんかいひ置いて行かなかつたか。』

『なんにもおつしやいませでした。』

『へんだね、だれかゞ奥さまを待つてゐるやうなことを言つて行かなかつたかい?』

『いゝえ、何んにも。』と、メニイヌは言つて、室を出て行つてしまつた。

アルマンはまるで狐にでもつまゝれたやうに、室の眞ん中にほんやり立つてゐた。

彼女がなんにもいはずに出て行つたことを、不思議に思はずにゐられなかつた。彼女が昨日いちんち泣きつゞけてゐたことゝ、急に變つた父親の親切な態度とを結び付けて考へて見ると、疑ひを抱かずにゐられなかつた。それに今朝追ひ出すやうにして巴里にやらしたことなどを考へて見ると、欺されたやうにも思はれるのであつた。しかし、將來の計畫まで立て、お互ひに犠牲を捧げ合つてゐたのに、いまさら偽らうとはどうしても思はれない。たぶん家具の好い買手でも出來て、そのとりきめに行つたのであらう——かう思つて氣を静めやうとしたが、どうしても何か事件が起つたかの

やうに、氣遣はれるのであつた。

午前二時になつてもマルグリットは歸つて來なかつた。

アルマンは暗い陰氣な室に、ゐたゞまらなくなつて、次の室へ行つた。そして、メニヌに、これから巴里へ迎ひに行くから、若しマルグリットが歸つて來たら、さう告げるやうにことづけをして、止めるのも聞かずに家を出た。

外は眼先が見えないほど、濃い闇であつた。一時前から降りだした雨は、道をすつかりぬかるみにしてゐた。

アルマンはオーバーの襟を立て、暗の中を走つて行つた。時々道端の木立に突き當りさうになつたり、小石に蹴つまづいたりした。途中でブウジヴァルの方へ走つて來る馬車に出遭つたので、マルグリットとくと呼んで見たが答へはなかつた。

やうやく巴里の町端れまで來たのは、二時間の後で、巴里市の姿に接すると、急に元氣を恢復して、彼れは勢よく走り出した。睡つてゐる市街をどん／＼走つて、アンタン街に着いた頃には、もう空が白みかけてゐた。

マルグリットの家の前に立つた時、五時を知らずサン・ルウ寺の鐘がさみしく鳴り響いた。それは絶望を告げる哀しい鐘のやうに、アルマンの胸に感じた。

家には誰もゐなかつた。門番はマルグリットから頼まれたといつて手紙を出した。

アルマンは市街を歩きながら、手紙を開封して文面を読み始めた。

『アルマンさま！ あなたがこの手紙をお読みになるときは、わたしは既に他人の有物となつてしまつてゐます。ですからわたしたちの關係はこれつきり切れたものと思つてください。あなたは田舎へ歸つてお父さまとお妹さまと一緒に幸福な日を送り遊ばせ。御生涯の中ほんの短い間戀人であつたマルグリット・ゴオチエの名はすぐお忘れになつてしまひます。』

これだけの文面を読み終ると、急に眼の前は深い靄に覆はれたやうに、なにもかも判らなくなつてしまつたほどの混亂に陥ち込んで行つた。彼れは危く昏倒しさうになつて、辛うじて道端の木立に身を支へてゐた。

しばらく経つて彼れは自分に氣付くと、一層深い悲哀に沈んだ。たゞ一言葉でも慰

めてくれる人があつたらと思つた。と、父のことが思ひ出された。彼れは狂人のやうにバリ・ホテルへ走つて行つた。

父は、突然飛び込んで來たアルマンの姿に一寸驚いたやうであつたが、かうあるべきを豫期してたやうに冷やゝかであつた。

アルマンは無言のまゝ、父の手に抱きついた。そして、マルグリットの手紙を父の前に投げ出して、思ふまゝ泣き入つた。

## 十三

翌朝、アルマンは少しばかりの元氣を恢復することは出來たが、昨夜遠道を無理に歩いた疲れと、悲しい出來ごとのために、いたましいほど弱り切つてしまつた。

彼れはその日の午後、父親に引きずられるやうに、田舎へ歸つて行つた。

彼れは一ヶ月の間、苦しい惱ましい生活をつゞけてゐたが、なんの慰安もないさみしい田舎には、どうしても辛捧してゐられなかつた。

美しいマルグリットの顔は、一瞬時も心から消えたことはなかつた。一夜のうちに殘酷にも彼れを捨て去つた女を、悪魔のやうに憎みながらも、忘れることは出來ないのであつた。もう一度會つて見たい。出來るなら戀を復活させたい。彼れはかう毎日のやうに思ひつゞけたのであつた。かうした想ひが段々増して、彼れの胸いつばいに溢れて來た時、田舎にじつとしてゐることも出來なくなつた。

アルマンは或る朝、巴里に急用が出來たといふ口實のもとに、父の家を飛び出してしまつた。

彼れはこれといふ考へもなしに、自分の事務所にやつて來た。そして先づ洋服を着換へた。時間はまだ早かつたし、天氣は實によかつたので、彼れはシャンゼリゼへ散歩に出かけた。しばらく歩かなかつた公園内の容子が、珍らしく、なつかしく思はれるのであつた。しばらくさうして歩いてゐるうちに、コンコルドをさして走つて來る一臺の馬車を彼れは見るとはなしに、じつと見た。その瞬間、この馬車がマルグリットの抱馬車であつたことに感づいた。馬も車臺も以前のまゝであつたので、きつと買

ひ戻したに違ひないと彼は思った。馬車の中を注意して見たが彼女は乗つてゐなかつた。しかし彼女は、馬車を先にやつて、自分は後から歩くことを、屢々以前にやつたのを、アルマンは知つてゐたので、四邊を見廻はすと、彼れがついぞ見たこともない女と、連れ立つて来るのに氣づいた。

彼れはわざと彼女の方に近寄つて摺れ違ひざまに、じつと見ると、マルグリットの顔は眞蒼まっさかになつた。そして神経的な薄笑ひを口元に浮べた。

アルマンの胸も激しく震えた。もう殆んど堪へかねるやうな想ひを、努めて冷淡な態度で隠しながら、平氣な顔付で、連れの女と馬車に乗らうとした昔の戀人に、わざとくさい挨拶をした。しかし間もなく、彼女の姿は馬車の中に隠されて、彼れから遠く去つて行つた。

アルマンは彼女の馬車が見えなくなるまで見送つてゐた。彼れはいま見たばかりの幸福らしい華やかなマルグリットの顔を思ひ浮べると、全身に戦慄を感じるほど、限りない憎惡を感じた。彼女はいまゝた新しい情夫を持つて、忌はしい淫蕩生活に浸

りつくしてゐるのであらう。あの見さけ果てた女のために、自分の生涯は無残にも傷つけられてしまつた——と思ふ瞬間、彼れの心にはむごたらしい復讐が湧き起つたのである。

彼れはなにごとか心竊に描いてゐるやうな、微笑を浮べながら、公園を出ると、ブルウダンスを訪ねた。丁度お客があつたと見えて、彼れはしばらく待たされた。やがて彼女は出て來た。

『お邪魔ではないでせうか。』と、アルマンは言つた。

『どういたしましたして、いまマルグリットさんが來てたんですよ。あなたが來たんで周章て、逃げ歸つたんです。』

『僕が怖いのかしら。』

『いゝえ、あなたの方でお會ひになつては、ばつが悪いだらうつていふんです。』

『だつて馬車やダイヤモンドが取り返したくつて僕を捨てた女ぢやないか。だがそれや當然なこつてこつちに文句はないがね。それに先刻もシャンゼリゼで會つたんだか

ら。』と、彼れは苦しいのをじつと堪へて言つた。

ブルウダンスは、あんなに熱してゐた男がよくもさう冷靜になれたもんだと思ふやうに彼れの顔を見てゐた。

『あれはシャンゼリゼでとても素敵なお美人と一緒にゐるが、君は誰だか知らない？』

『あれはオリンプさん、トロンシユ街の十番にゐるんです。あなたはあの女と關係するつもり？』

『それや分らないよ。』

『ではマルグリットさんとは？』

『それや思つてないことはないけど、あゝ一夜で捨てられちや思ひ過ぎたのが馬鹿らしいからね。』と、アルマンは一層平氣を装ふて言つた。

『あの女だつて、あなたを思つてゐるのよ。あなたの頭文字の附いた小箱は一生手元に置きたいつて持つてゐますものね。なんならお返しするやうに申しませうか。』

『持たしといつていゝよ。』と言つて、アルマンは思はず口ごもつた。マルグリットが、

自分の持ち物を残して置いて、忘れまいとしてゐてくれるのかと思ふと、心からの涙が湧いて、いま若し彼女がこゝへ來たなら、復讐どころか彼女の脚もとに身を投げ出すであらうと思つた。

ブルウダンスは尙話しつゝけた。

『あなたがそんなに分つてゐてくださるのをあの女が知つたらきつと喜ぶでせうよ。』

あの女も好い時にあなたと別れましたよ。わたしもすいぶん骨を折つたんです。N伯爵から八千圓出して貰つて、家の方も無事に濟んだんです。でもあの女は伯爵をちつとも思つてやしません、毎日のやうにやけ酒に浸つてゐますもの。あなた一寸お會ひになりますか。』

『會ふ必要はないよ。』と、アルマンは思ひ切つて言つた。

もうそれ以上ブルウダンスの話聞いてゐられなかつたので、アルマンはすぐそこを辭した。

事務所へ歸つて來ると、彼れの胸はまた激しい復讐の炎が燃えた。

「マルグリットはやつぱりあゝした社會の淺ましい女であつた。あれほど愛してゐた自分を捨て、忌はしい過去の生活へ歸つて行つたのである。」かう思ふと、憤怒は胸いつぱいになつて、一時も裕餘が出来なくなつた。

彼れは近々オリンプの催しで夜會があるといふことを知つてゐたので、その翌日出来る限り手をつくして招待状を手に入れた。

アルマンが遣瀨ない想ひを抱いて、夜會に姿を現はした頃は、人々は踊り狂つてゐる眞ツ最中であつた。

アルマンは暖爐の傍へ腰をかけて、夜の更くるのに氣づかず踊つてゐる人々の姿を見てゐた。その時彼等の間に交つて、N伯爵と躍つてゐるマルグリットの視線と、彼れの視線とが遇つた。彼女は昏倒しさうになつて、すぐ舞踏をやめてしまつた。

四人組の舞踏が終つた時、アルマンはオリンプのところへ挨拶に行つた。彼女は美しい双の肩を露はに、玉のやうな肌まで見せてゐた。そのあでやかな姿は、男の心をうつとり酔はすほどであつた。

この女を情婦にしやうと、アルマンは心の中で決めて、彼女と組んで踊り初めた。マルグリットは彼等が踊つてゐるのを見ると、死人のやうな蒼冷めた顔色になつて、すぐ夜會から姿を消してしまつた。

#### 十四

アルマンはその夜賭博で勝つた六百圓の金で、なんなくオリンプを手に入れてしまつた。

翌日の十二時に近くに、オリンプの家を出る時は、もうすつかり情人になりすましてゐた。が、六百圓の金に對してしなければならぬ義務のやうに、甘つたるい口説やお世辭をいはれるのが、アルマンはたまらなく不快であつた。そして、初めて愛した時のマルグリットの清らかさが想ひ出されるのであつた。

彼れはオリンプと一緒にゐるのは一時もいやになつたが、マルグリットを苦しめるには、彼女と親しく装ふよりしやうがなかつた。

彼れはオリンブのために、馬車も寶石も買つてやり、さうした女の情人としてやるだけのことはみんなやつてのけた。二人の間柄は早くも世間の評判となつた。

ブルウダンスさへ世評をほんとうにして、彼れがマルグリットを忘れてしまつたものと思ひ込んだ。

しかし、マルグリットだけは、アルマンのほんとうの心持ちを悟つたのか、彼れの意地悪い迫害に堪へて、軽々しい態度を見せるやうなことはなかつた。たゞ彼に會ふたびに、マルグリットの顔は青冷めて、堪へ難い苦しみを覺えるやうに、うち沈んでしまふのであつた。

さうした苦しきやうな容子を見るたびに、アルマンは愉快で、勝利を得たやうな喜びを感じるのであつた。彼女に對する彼れの所業が、一層むごたらしく、下劣になつて行くと、彼女は哀願するやうな眼付きで、彼れの方を見るのであつた。彼れは思はず自分の卑劣に氣付いて謝罪しやうとさへ思ふのであるが、それも一寸の間であつた。

オリンブはマルグリットを苦しめてゐるさへすれば、どんな無理でもアルマンに聞い

て貰へるといふことを知つて、絶えず彼れを焚きつけて、機會さへあれば彼女を虐めぬいた。

マルグリットは遂々夜會や、劇場に姿を見せなくなつてしまつた。全くむごたらしい二人のやりかたに、もう堪へることが出来なくなつたのであらう。しかしアルマンは狂氣のやうになつて、彼女を苦しめることをやめなかつた。こんどは匿名の手紙にある限りの侮蔑を書きつらねて、彼女を苦しめた。

マルグリットはそれにして、品格をおとすやうなことは少しもしないで、張り合ひのないほど取合はうとしなかつた。さうした彼女の態度が、自分より優れてゐるところが、アルマンにはよく分つて、憎悪は一層強くなるばかりであつた。

ある日オリンブは何かの會場に行つて、マルグリットに會つたので、いつものやうに侮蔑すると、始終の侮辱に堪へられなくなつたマルグリットも黙つてゐなかつた。オリンブは反對にやりこめられた。彼女は火のやうに憤つて會場を去るし、マルグリットは卒倒するといふ騒ぎであつた。

アルマンはこの出来事を聞くと、マルグリットを苦しめるのに、なにより好い材料だと思ひ喜んだ。オリンプは自分の愛する情婦であるから、尊敬を拂はなければ承知しないと書いて、辱しめや、苦しめの言葉のある限り書き足して、マルグリットのもとへ送つた。

あの手紙には、さすがの彼女も、もう黙つてはゐられまいと思つて、初めて立派に復讐を遂げたやうに満足しながら、その日は終日外出しなかつた。

彼れが思つた通り、午後二時頃、マルグツリットの使命を帯びたやうな容子でブルウダンスが訪ねて来た。

彼れが巴里へ歸つて来てから、三週間もつゞけざまに苦しめつゞけたので、マルグリットは全く弱り切つてゐる所へ、今朝の手紙で遂々病床に就いてしまつた。身も心もすつかり疲れ果てゝしまつてゐる哀れな女を、どうぞ虐めないでくれるやうにと頼んでよこしたのである。

マルグリットが僕を捨てたのは正當な権利であらうが、僕の愛する情人を侮辱する

なんて許すことは出来ない。』と、アルマンは努めて冷淡に言つた。

『あなたはあの犬のやうな恥知らずの女にいゝやうにされてゐるんですね。それやあんなが、マルグリットさんを思つてゐながらそんなことをやつてゐるのはよく分つてゐるけれど、もう防ぐ力もなんにもなくなつてしまつた女をさうまでいぢめなくつたつて良いぢやありませんか』

かういはれると、アルマンは自分の卑劣をつくづく恥かしく思ふのであるが、それでも無理に平靜を装うてゐた。

『マルグリットさんの方からも、大事なN伯爵をよこせば、どつちも對等になるぢやないか。』

『そんなことが出来るやうな女ぢやないことはあなただつて知つてゐる筈でせう。あなただつてあの女おひめにお會ひになれば、けふまでさんざん虐めたことが恥しくなりますよ。あの人はもうすつかり弱つてしまつて、いつ死ぬか知れないほどですよ。』  
ブルウダンスはアルマンの手を握つてまたつゞけた。



『兎に角一度いらしつて會つてあけてくださいよ。あの女はどんなに喜ぶか知れやしませんわ。』

『僕は伯爵に會ふのはいやだからね。』

『伯爵はめつたにゐやあしませんよ。マルグリットさんはあの方を嫌つてゐるんですもの。』

『あれが僕に會ひたがつてゐるなら、僕の住居を知つてゐるんだから向ふから訪ねて來さうなもんぢやないか。僕はアンタン街へ足を踏み入れるのは嫌やだよ。』

『あの方が來たらあなたはよくしてあけてくださつて?』

『大丈夫そんな心配は無用です。』

『あの方はきつと來ますよ。』

『かつてに來さしたらいいでせう。』と、アルマンは平氣で言つたが、彼れの胸は激しく震へたのである。

『あなた今夜お宅ですか。』

『ずつとゐます。』

『ぢや來るやうに言つてやりますわ。』

ブルウダンスはかう言つて歸つて行つた。

アルマンはとり残されたやうに、しばらくほんやり考へ込んでゐた。今晚はオリンブに會ふ日だが、行かれないと知らしてやる氣さへしなかつた。もう二度と會ふ氣がなくなつてゐた。

彼れは夕方になると、食事をしに出かけて行つたが、いつも長い食事も、そこへ出して歸つて來た。下男のジョセフを呼んで、暖爐に火を入れさせてから、遊びに出してやつた。

彼れは長椅子に腰をかけて、兩手で頭を支へながら、マルグリットの來るのを、長い間待つてゐた。彼女に會つたら、なにをいはうかと、いろ／＼考へて見たが、まともな考へはどうしても出て來なかつた。一年前この室で、彼女に詫びたことなどが、しきりに思ひ出されて、悲しいわけのわからぬ氣持ちになるばかりであつた。

九時近くになつた時、突然鈴が鳴つた。彼れは扉を開けると、よろ／＼として危く倒れさうになつたが、やうやく壁に身を支へて足を踏みしめた。幸ひ入口の所は薄暗かつたので、彼れの顔色が變つたことは、相手には判らないやうであつた。

マルグリットは室内へ入つて來た。彼女はすつくり黒衣に身を包んだ上に、頭からベールを被つてゐたので、顔ははつきり見えなかつた。疲れ切つた身體を投げかけるやうに、椅子へ腰をおろすと初めてベールを取つた。その顔の蒼さと言つたら、生きた人と思へないほどであつた。

『アルマンさま、あなたは會いたいつておつしやつたさうですね。で、わたしまゐりましたの。』

と、彼女は言つて、両手で顔を覆ひながら、いたましいほど泣き入つた。

アルマンは惹きつけられるやうに、彼女に近よつた。

『どうしたといふんですね。』と、彼れはやきもきした調子で訊ねた。

彼女はなんとも答へずに、彼れの手を握りしめた。とめどない涙のために、聲も出

ないのであつた。五六分経つと、いくらか氣を取り直したやうに口を切つた。

『アルマンさま、あなたはするぶんおいぢめになりましたわね、わたしなんにもしませんのに。』

『なんにもしない？』と、冷たい微笑を浮べてアルマンは言つた。

『えゝなんにも、時と場合とで詮方のないのは別ですけれど。』

アルマンは急に黙つてしまつた。そして、ぢつと彼女の姿を視詰めてゐると、以前より一層彼女を愛してゐるのを感じるのであつた。

アルマンが話し出せなくて、思つてゐるのをマルグリットは察したのか、苦しさをな息づきのうちに言葉をついだ。

『アルマンさま、わたしは今夜二つのお願いがあつてまゐりましたの。きのふわたしがオリンプさんにしたことはかんにんしてください。で、あなたは、わたしをもつと窘めるつもりでゐらつしやるんでせうが、それはもうお許しなすつてくださいまし。わ巴里へお歸りになつてからあなたはのべつにわたしをお苦しめになるんですもの。わ

たし全く弱りきつてしまひましたの。あなたゝつて少しは可哀想だと思つてくださるでせう。それに人情のある方なら私のやうに死にかゝつてゐる女に復讐をしなくたつて、もつと何か高尚ななさりかたもございませう。それはあなたにもお分りになつていらつしやいますわ。わたしのこの手をどうぞお取りになつてください。こんなにひどい發熱ですよ。わたしがわざ／＼床を離れて來たのは昔のやうになりたいためではございませんの、たゞそつと無關係であつていたゞきたいからです、』

アルマンは彼女の手を執つた。手は驚くほど燃えてゐて、温い天鵞絨の外套を着てゐながら悪感に全身を慄はしてゐた。彼れ椅子を廻はして、暖爐の方へ近づけてやつた。

アルマンは思ひ切つて、苦しい胸から言葉をやうやく出した。

『おまへと別れてから、僕が少しも苦しまずにゐたと思つてゐるのかね。僕はあの晩ブウジヴァルの家でおまいをさんざん待つた揚句眞夜中に雨にぬれて巴里までやつて來たんだ。ところが受け取つたのはあの別れ手紙さ。僕はおかけで半狂亂になつちや

つた。マルゲリット、あんなに愛してゐた僕を、よくも欺したね。』アルマンの聲は激しく震えてゐた。

『そんなことはおつしやらないでください。そんなお話で上つたんぢやないんですのたゞ敵同志になりたくないからです。どうぞもう一度お手を執らしてください。あなたには立派なお氣に入りの情婦があるさうですから、その人と幸福におくらしなさいませ。』

『そしておまへは——勿論幸福なんだね。』

『わたしがそんなに幸福と見えまして？苦しんでゐる者をおからかひなつちやいけません。あなたはわたしの氣持ちを誰よりもよく御存知ぢやありませんか。』

『ほんとうにその通りならおまへは勝手に不幸になつたんだよ。』

『あなた事情つてものは、わたしたちにどうすることも出来ない大きな力なんです、わたしはあなたが想つてゐらつしやるやうな浮ついた感情でしたんてはありません。どうしても止むを得ない事情でさうしたんです。いつかその理由がお分りになれば、

きつとあなたはわたしをお許しになります。」

『なぜこの場でその理由をいつてくれないの?』

「いつたところで以前のやうにはなれませんし、却てあなたがお別れになつてはいけない方と、お別れしなければならぬやうになります。それはきつとあなたには大きな不幸ですわ。』

『だれのことなんだい?』

『いまはいへません。』

『おまへはやつぱり嘘をいつてゐるんだ。』と、アルマンは叫んで、扉の方へ行つた。

『どうしても歸つちやいけない。』

かう言つて彼れは扉の前に立ち塞がつた。かつてはオペラ・コミック劇場で、彼れを嘲つたことのある女が、いまは痛ましいほど蒼ざめて、泣きながら黙つてゐるのを見ると、彼れは無限の感慨に打たれずにはゐられなかつた。

『なぜですの?』と彼女はやうやく顔を上げて哀しい聲で言つた。

『なぜだつて僕はいまもおまへを愛してゐるからどうしても歸すことは出来ないんだ。』

『明朝になれば追ん出すつもりでせう。えゝきつとさうよ、でもいけませんわ。わたしたちはどうしたつて別々の道を歩いて行かねばならないやう運命づけられてゐるんです。いまさら元へ歸らうと思つても駄目なんでございます。あなたはいまはわたしをお憎みになつてゐるだけですけど、きつと終ひにはわたしを輕蔑なさいます。』

『いゝや、マルグリット!』

凡ての望みも、愛も、この女の前にも湧き起つて來るのを感じながら、彼れは狂氣の如く叫んだ。

『僕はもう過去は何もかも忘れてしまはう。ね、以前約束したやうに楽しく二人で暮さうよ。』と、彼は言つた。

マルグリットは不安らしく頭を振つた。

『わたしはあなたの奴隷なのよ。さああなたのお好きなやうになすつてください。思

ふ存分に、どうせあなたのものなんですから。』

彼女はかう言つて、外套も帽子も脱ぎ捨てた。そして無造作に銅着まで脱がうとしたが、病氣のために、いまゝで蒼ざめてゐた顔に、ほつと紅をちらしたほど、のほせ上つた。苦しさに息づきながら、乾き切つた激しい咳をしつゝけた。

『馬丁に歸れつておつしやつてください。』と彼女は言つた。

アルマンは大急ぎでさう言ひに行つた。室に歸つて見ると、彼女は熱いくらゐるな暖爐の傍にゐながら寒さに堪へ切れぬやうに身を震はしてゐた。

アルマンは彼女の身體を抱き上げた。彼女は彼れのするまゝになつてゐた。彼れは着物を脱がして寢臺へ連れて行つた。そして彼女の傍へ附き添つて、手厚い看護をした。

彼女は無言のまゝアルマンの顔を見て笑つてゐるのであつた。

アルマンは彼女をしつかりと抱いた。もう二度と再び他人のものとはしまいと思つた。マルグリットは自分の生命さへも捧けて、あらん限りの愛情をつくした。

太陽がかなり高くなつてから、二人はやうやく眼を覺ました。

マルグリットの顔は蒼ざめて、鉛の色のやうに見えた。彼女はなんにもいはなかつた眼には涙がいつぱい溢れて、兩頬に傳つて流れた。折々やせ細つた手を差し出してはアルマンにとりすがるのであつたが、また力なく床の上に倒れ伏した。

アルマンはブウジヴァルで別れて以來、どんなことが起つたのであるか、忘れてしまつたやうな氣持ちがした。

『どつか遠いところへ行つちまはう。これからすぐ巴里を立たう。』と、彼れは急ぎ込んで言つた。

彼女は急に恐怖を感じたやうに、『いゝえ／＼もしそんなことをしたら大變なことになる。あなたのおつしやるとほりになつてはゐられません。でも少しでも息の通つてゐるうちはあなたの奴隷なんですから、いつでもお勝手な時にいらしつて下さい。ね、わたしはあなたのもんですもの。でも始終一緒に暮さうとしてはお互ひに不幸になるんです。此の上はどうぞお訊きにならないでね。』と言つて、暫くすると仕度

をして、アンタンの家へ歸つて行つた。

彼女が歸つてしまつてから三時間も経つても、アルマンは寢臺の上に坐つて、そこに遺されて行つた女の香を、尙嗅ぎ慕ふやうにその場から離れやうとしなかつた。彼れはいつかまた、戀と嫉妬の惱みに掩はれて行つた。

彼れは午後五時になると殆んど、無意識にアンタン街へ出かけて行つた。出て來たのは女中のナニヌであつた。

『奥さまにはお逢ひになれませんでございますよ。』と、如何にも氣の毒らしく言つた。

『なぜ出來ないのか』と、彼れは怒りを含んだ聲で言つた。

『あの——伯爵がゐらつしやいますんで、伯爵は誰もお通し申してはならないつてさうおつしやるんでございます。』

『さうく、僕は忘れてゐたつけ。』と、吃りながら彼は言つた。

彼れはまるで盗人のやうな容子で、まつしぐらに家へ歸つて來た。嫉妬の炎は彼れ

を半ば狂人にして、淺ましいことを平氣でやつた。

彼は伯爵と回ひ合つてゐるマルグリットの姿を思ひ浮べた。そして昨夜彼に言つたと同じやうなことを、彼女は言つてゐるに違ひないと思つた。

彼れは二百圓札を取り出して、次のやうな文句を添へて、彼女の處へ送つた。

『けさほど急いでお歸りになられたので、昨夜の代を忘れて居りました。』

彼れはそれを出してしまふと、あまりに賤しいことをやつてしまつたのに、急に氣づいて來て、家にゐることさへたまらなく恥しくなつた。彼れは逃げ出すやうに家を飛び出した。

彼れはオリンプの所へ行つて見た。彼女は丁度起きたばかりで、彼れを慰めるやうに、いつもの猥褻な小唄を得意になつて唄ひ出した。

この女こそ正しく娼婦だと思ふと、アルマンはもう一時もその場にゐられなくなつて、彼女から無心された金を投げつけると、また家へ引つ返して行つた。

彼れはもういまにも發狂しさうに、胸をわく／＼させて、マルグリットから返事が

來るかと待つてゐた。

六時半過ぎになつて、どこの者とも分らない使ひが、手紙と二百圓札と届けて來た。

『君はいつたい誰から頼まれたんだ？』

彼れは不思議に思つて訊ねた。

『次の汽車で小間使ひと一緒にブウロオギユへお立ちになる奥さまから頼まれたんですが汽車が出た後で持つて行けとおつしやつたんです。』

彼れは手紙も札も放り投げて、アンタン町へ駈け出して行つた。

「奥さまは六時の汽車でイギリスへお立ちになりましたよ。」と、門番は言つた。

マルグリットがゐなくなつてしまつたと同時に、彼れの心を煮きつけるやうなものは最早巴里にはなくなつてしまつた。戀も怨も、全く忘れてしまつたやうであつた。彼れは長い間患つてゐた病人のやう疲れ切つてしまつた。丁度その時、東洋へ旅行しやうといふ友人があつたので、彼れも行く氣になつて、父の元へさう言つてやつた。

父はすぐ承知して、旅費に、紹介狀のやうなものまで添へて送つて來た。

十日ばかりの後、アルマンはマルセイユの港を出帆した。

## 十五

アルマンはかなり長い海の旅をつゞけた。

マルセイユを出帆してから、幸ひ好い天氣ばかりつゞいたので、青々とした果てしない水面を、まるで潮水の上を走るやうに、靜かに船は滑つて行つた。

アルマンはいつも甲板に出て、青い海を眺めてゐた。海は彼れのすさみ果てた氣持ちを清め、たへがたい心の悩みを慰めてくれた。

彼れはマルグリットを忘れてしまつたのではなかつた。忘れやうとしたつて、忘れることは出来なかつたのである。あらゆる卑劣な手段を以て彼女を苦しめた己れの淺ましさを、絶えず悔いつゞけてゐたのであつた。

アレキサンドリヤに着いた時、彼れはマルグリットの家でよく會つたことのある、

公使館附武官に遇然出會つた。その男からマルグリットの病氣は危篤であるといふことを聞いて、彼れは初めて謝罪の手紙を彼女に送つたのであつた。

思ひもよらぬ彼女からの返書を、ツウロンで手にした時、彼れは夢ではないかと喜んですぐ開封して見た。筆は彼女に違ひなかつたが、文字がひどく震えてゐるのを見ると、苦悶の中にやうやく認めたものであるといふことがすぐ解つた。彼れは心臓の鼓動を激しく波うたせながら、一心に讀んで行つた。

「アルマン様——おなつかしいお手紙拜見いたしました。いつもながらの御親切に泣いて喜びました。わたしはロンドンから歸つて來てから、ずつと病氣をして居りますもう今度といふ今度は、どうしても助かる見込みはありません。あなたがいつまでもわたしをお見捨てくださらぬお情は、わたしの病苦をどんなにか軽くしてくれます。せめては斯んな優しいお手紙をお書きになつたお手を、二度とることが出来るまで、生きてゐたいと思ひますが、それはとても叶はぬ望みでございませう。あなたがもつと近い所にゐらつしやるなら、また會ふことも出来ない限りませんが、意地悪い運命

は、どうしてもあなたを遠ざけてをかねば氣がすまないんでせう。それに今のマルグリットには、昔の面影は哀れにも失はれてしまひました。いつそお會ひしない方がよいかも知れませぬわ。過ぎし日の罪を許せとのお言葉————どうしておゆるししないのでゐられませう。あなたがわたしをお苦しめになつたことは、わたしを愛してくださいつてゐた證據でございませぬもの。

わたしはこの一ヶ月の間、ずつと寢床についたつきりである。わたしは床に就くやうになつてから最後の日まで、毎日あなたのためにいくらかの時間を捧けて、日記を書きつけました。どうぞわたしを哀れにおほしめすなら、巴里へお歸りになつて、ジュリイ・ヂュブラアをお訪ねください。ジュリイは日記をあなたにお渡しします。或はお消息がなくつとも、あなたがフランスへお歸りになればお手元へ送ることになつて居ります。それをお讀みくださりさへすれば、苦しみを忍んで、無理にあなたからお別れた理由がお分りになると思ひます。十分わたしの心を御理解していただき、てこそ、わたしの靈は安らかなやすみ場を得られる譯でございませぬ。



アルマン様——わたしはいつまでもあなたが思ひ出してくださいるやうな紀念かたみの品を遺して行きたいのですが、わたしの持物は凡て差押へにされてしまひましたわたしはいま死の床に就いてるのに、客の間では債権者の番人が足音を響かせてるます。

なんとといふ無慈悲な人々でありませう。たゞ神さまだけが、わたしをお護りくださいます。それにジュリイさまが親切にお世話下さいますので、わたしはいま辛うじて息をつゞけてゐるのでございます。わたしの死と同時に、凡ての品物は競賣にされるのです。ですから競賣日には是非ともいらしつて、何か知らお求めになつてくださいます。

あゝ、わたしがいま別れを告げやうとしてゐる人の世は、なぜこんなに悲しいのでございませう。せめて神さまの慈悲に依て、わたしが息を引き取らうとする前に、たつた一目あなたにお目にかゝることが出来たなら！が、それは望んだとて得られない果敢ない望みであります。ではこのまゝ永久にお別れいたします。なつかしいアルマ

ンさま、さようなら！さようなら！

お醫者さまが病氣を癒なほさうとして血液をとりましたので、ペンを持つ手が自由にならなくなつてしまひましたの。」

これからあと六七行書いてあつたが、何が書いてあるのか、どうしても讀むことは出来なかつた。

アルマンは巴里へ歸るために、大急ぎでツウロンを出發した。

長い航海をつゞけて、やうやく彼れが巴里に歸りついた時には、いふまでもなくマルグリットはこの世の人ではなかつた。競賣の日も疾うにすんでゐたが、彼等の悲しい運命を語るやうな、マノン・レスコオ、といふ悲しい物語本だけは、買ひ取つた人の手から取戻とりもどすことが出来た。

マルグリットが遺して行つた日記は、ジュリイから彼れの手元へ届けられた。日記を讀んだ時、彼れの家庭の幸福のために、彼女は喜んで犠牲になつたのだといふことを、アルマンは初めて知つた。そして、彼れがなした罪を、彼女が許してくれたにし

でも、それは死に換へても許されないことだと彼れは思つた。

日記は讀むにさへ忍びない、次のやうな悲しい心の記録であつた。

十二月十五日。わたしは巴里を去つてロンドンへ來てから、丁度この地にお住みのG伯爵のお世話になりました。伯爵は交際社會へわたしをお紹介下さるのは御迷惑のやうでしたが、お知り合ひの方々に紹介して下さいましたので、その方々の一人が、わたくしのために晚餐會を催して下さいました。わたしはその紳士のお宅へ御厄介になるやうになつたのです。それより他に道がありませんのですもの。

自殺を想ひ立つても見ましたが、そんなことをすれば、あなたの生涯を傷つけますし、どんなにかお悩みをかけるかも知れぬと思つて思ひとまりましたの。いまに死にかゝつてゐるものが、自殺してなんの益がありません。わたしは靈のない獸のやうな醜い生活をつゞけて行きました。

巴里へ歸つて來てから、あなたの御様子を訪ねて見ましたら、どこか遠くへ旅行なすつたと承りました。じつとしては生活して行かれませんか。わたしはまた、三年前初

めてあなたに會つた時のやうな、醜い、いまはしい生活をしなければならなくなつたのです。もう一度伯爵に願ひしやうとしたんですが、聞いては下さりませんでした。わたしは日増しに衰へて、蒼くなつて行きました。戀をあさる人は、受取る前に品物を調べないではおきません。巴里には華やかで、もつと肥つた女がたくさんゐますもの。わたしはかうして世間から全く捨てられてしまつたんです。

わたしはもう幾日と生きてゐられません。伯爵に手紙を出して無心を言つてやりました。一錢もないのに掛け取りは情なくつめかけて來ます。アルマン様、あなたが巴里においでになつたら、來ても下さるでせうし、どんなにか慰めてくださるでせう。

十二月二十日、今日ひどい雪の日です。わたしはたつた獨りほつちで家にゐますのもう三日も激しい熱が出つゞけたので、あなたに手紙を書くペンさへとることが出来ません。あなたはちつとも御消息を知らして下さいませんかのね男つてものは。本當に氣が強いもんぢすね。伯爵すらおたよりをくださいませぬ。あなたは陽氣のいゝお國にいらしつて、心をお痛めになるやうなこともなく、楽しくお暮しのことゝ思ひま

す。ほんとに美しい気がいたしますわ。

もう此頃は見舞ひに来てくれる方もありません。来てくださるのはジュリイさんだけです。

わたしが最初に病氣になりました時には、まだお知合でなかつたのに、あなたは毎日やのやうに見舞つてくださいましたわね。今から思ひ出すと、涙が出るほどありがたい氣持ちがします。あなたとの短い六ヶ月の生活の間に、わたしは女として出来る限りをつくしたつもりです。でもいまは、あなたは遠くへ行かれてしまつて、慰めのたより一つもくだらないですもの。けれどあなたは、もしいまこの巴里にいらつしやるとしたら、きつとわたしの傍に付きつきりで慰めてくださいますでせう。わたしはさう信じて居ります。

十二月二十五日。お醫者さまはわたしが手紙を書くことをおとめになります。今日といふ今日は、嬉しくつてどうしても書かずにはゐられないんです。といふのは、あなたのお父さまが、優しいお手紙をくださったからです。それは次のやうな手紙な

んです。

『あなたには御病氣のさうですが、いかゞですか。ぜひお見舞ひに上りたいのですが、非常な多忙中でお伺ひすることが出来ません。アルマンが居れば早速御伺ひさせるのでありますがあれは六百里も隔てた所ではどうにも仕方がありません。かやうな次第ですから、手紙にてお伺する譯であります。一日も早く御快癒を祈ります。尙わたしの親友M・Hがわたしの依頼により參上致しますから、何卒御會ひになるやうに願ひます。』

あなたのお父さまはお心の優しい方です。あんな立派な方は珍らしいと思ひます。どうぞ孝行をなさるやうに願ひます。

今朝ほど手紙のとほりM・Hといふ人がまゐりまして、お父さまからだと言つて千二百圓のお金を持つてまゐりました。わたしは初めお断はりましたが、是非とも取るやうにおすゝめになるんで、ありがたく頂戴いたしました。あなたのお父さまからいたゞくんで、施しを受けるのではないと思ひましたから。

あなたが巴里に歸つてゐらつした時、わたしがもうこの世にゐませんでしたら、このひとくだけりをお父さまに見せて、わたしが如何に喜んだかをお知らせ下さい。一月四日。わたしは苦しい日ばかりを送つてゐます。どうしてかう身體が保つてゐるのだから自分ながら不思議な氣がします。これもわたしが過去に犯した罪の報ひでありませう。

この頃はまいばんわたしの寢床の傍に附いてゐてくれるものがあります。が、それはなんだか分らない不思議な影のやうな人です。烈しい咳とめまひに、はかない生命がもうすぐに消えさうに思はれます。

お天氣はよくつてもいつも、霜がありますのに、もう四五日も天氣がつゞいたら散歩ぐらゐはいゝと醫者は申しました。

わたしの食堂には、ボンボンだの其他贈物がいつぱいです。わたしの病がよくなつたら、後々情婦にでもしやうと思ふ若い方の御機嫌とりのもありました。でもわたしの病氣を知つたら恐れてよりつかなくなるでせう。

ブルウダンスはこの贈物を自分のお年玉に使つてゐます。

一月八日。昨日は遂々馬車で散歩に出かけてしまひました。シヤンゼリゼはさすがに大變な人出でゝした。わたしのやうな病人でも、さすがは春だといふ氣持ちを抱きました。うらゝかな日光といふものは、それほど大きな喜びと慰安とを與へるものであらうとは、わたしいまのいまゝで知らずにもたやうな氣がいたしました。

ずいぶんたくさんの知り合ひの方にお會ひしました。みなさまのお顔はみんな嬉しさうに楽しく見えました。でもさうした幸福な方たちは自分の幸福にはお氣がつかないやうです。

あなたの御存知なオリンブさんが、N伯爵から買つてもらつた美しい馬車に乗つてわたしの傍を通り過ぎました。一寸眼で御會釋なさつたきりでした。でもわたしがそんな輕蔑めいたことなんか、少しも氣にとめないのを、あの人は御存知なかつたでせう。

ずつと以前からお知り合ひのある若い方に會ひましたら、その方のお友だちで、大

變わたしと近づきになりたがつていらつしやる方と、是非一緒に食事をするやうにおすゝめになりましたけれど、わたしはたゞ笑つて、握手をしたゞけでしたの。その方はわたしの燃ゆるやうな手をとつて、驚きになつた容子つたら全く滑稽だつたくらゐりました。

家に歸つたのは四時頃でした。夕飯のおいしかつたといつたら、この頃になかつたことでした。散歩はたしかに身體のためによかつたと思ひました。

人々の幸福な容子を見ますと、わたしだつて生を楽しみたいといふ心が、しみじみ起つてきます。だのにわたしは、昨夜は薄暗い病室で、一刻も早く死んでしまひたいと思つて、さめぐと泣き入つたのでした。

一月十日。散歩したおかげで病氣がよくなるなどと思つたのは、全く夢のやうな望みでした。

わたしはまたずつと床に就いたきりになりました。胸は一面濕布で蔽はれました。以前わたくしに驚くほどのお金をかけてくださつた方々に、いまこの身體をお任せす

るとなつたら、いくら値段をお付けになることでせう、わたしはつい斯んなことを思つて、どんなに苦しんだか知れません。

一月十二日。ずつと引きつゝいて苦しみつゝけて居ります。昨日N伯がお金を送つてよこしました。でもわたしはすぐ送り返へしてしまひました。あの方のために、あなたはわたしから離れて、そんな遠くの地へ行つていらつしやるんですもの。

あゝわたしたちの生涯で一番楽しかつたのはブウジヴアルの日でした。わたしが若し生きてゐて、この家から出られるとしたら、第一にあの家に行つて、死ぬまであすこから離れないでせう。が、明日この日記がつゝけられるか、どうか覺束ないほどわたしは弱り切つてゐます。

一月二十五日。もう十一日間もつゞけさまに毎夜ねられませんの。息が詰まつて苦しくつてたまらないんです。いま死ぬか、いま死ぬかとばかり思つてゐます。お醫者さまはペンを持つことを絶対に止めました。ですけどわたしの傍に付きつきりであるジュリイがそつと許してくれました。ですから數行をやうやく書くことが出來たん

です。

あなたお願いです、どうぞわたしが死ぬ前に歸つて下さらない？それともこのまゝ永のお別れでせうか。あなた歸つて来て下されば病気がすぐなほりさうな気がしますの。癒つたらわたしはどうなませう？やつぱり生きてゐない方がよいのか知れない。

一月二十八日。わたしは今朝、大きな物音に早くから眼をさましてしまひました。

わたしの部屋に一緒にねてゐたジュリイが食堂へ出て行つて見ますと、恐ろしい見幕の執達吏なんです。わたしはジュリイになんでもいゝから役人に任すやうにいひ付けました。すると執達吏は帽子のまゝ入つて来て、いちゝなんでも書き止めながら、目の前に死にかゝつてゐる女がねてゐるの知らん顔でゐました。わたしの病氣はこの爲めに一層悪くなりました。ブルウダンスはあなたのお父さんにお願ひして、少しでも金を借りたらとすゝめましたが、わたしは承知しませんでした。

一月三十日。けさほどあなたからのお手紙を受取りました。わたしはどんなに待つ

てゐるか知れませんが、でもあなたのお手紙を読んで、六週間といふ永い間の苦しみをすつかり忘れてしまつたやうな気がします。この分ならあなたがお歸りになるまで生きてゐられるかも知れません。あなたは以前のやうに愛してください、もう一度楽しい生活が出来るやうな気がいたします。でも返事を書くにしましてもろろろ書けないのでございます。やつぱり生きてはゐられないのでせう。しかし、どつちにしてもわたしはあなたを愛します。あなたが歸つて来てわたしの傍で看護してください、ことや、昔の樂しかつたことを思ひ出すことがなかつたら、わたしは疾うに死んでしまつたでせうから。

二月四日。G伯爵が歸つて來られました。伯爵は情婦から欺されなすつたさうで、その悲しみを話しにわざゝわたしをお訪ねなすつたんです。伯爵はお氣の毒にも、ださいます。わたしは伯爵にあなたのことをお話ししましたら、私のことをあなたに話してやるとおつしやつてゐました。以前わたしはあの方と妙な關係がありましたの

に。その時は前後の考もなく話したもんですから、何んでも打ち明けました。伯爵の方でも以前のことは思ひ出さないやうに努めてゐらしやつたやうです。

昨日伯爵が見舞ひにおいでくださいました。わたしの傍に三時間ばかりゐらつしやいましたが、その間殆んど口をおきゝになりません。わたしの血の氣のない顔をござらんなつては涙をおこほしになりますのよ。きつとお嬢さまの御臨終の時を思ひ出しになつたんでせう。伯爵は二度お嬢さまの死にお會ひになるやうな氣持ちがなされたんでせう。伯爵もいろ／＼御苦勞をなさると見えて、だいぶ疲れの容子が見えるやうでした。もうお腰も屈んでをりますし、お口のしまりさへなくなつたやうに見えますでもいまわたしの前にゐらつしやる伯爵の顔を見ますと、若い身空でいまにも死にかゝつてゐるわたしに較べて、伯爵の顔には御健康を誇るやうな御満足な容子をうかゞはれるやうでした。

このごろまた陽氣が悪くなつて來ました。陽氣と同じやうにわたしも悪くなつて來ました。誰一人見舞つてくれる人はなくなりました。でもジュリイが傍にすつと付き

つきりで、ほんとに眞心からの親切をつくしてくれれます。ブルウダンスは何か用事にかこつけては、わたしの傍へ來ないやうにしてゐます。きつとお給金が十分貰へないのが不満なんでせう。

お醫者さまはいろんな氣やすめを言つて、力をつけやうとしてくださいますが、わたしはもう間もなく死にかゝつてゐることがよく分るんです。もう靜かに死を待つてゐるより他に道はございません。一年足らずのうちに死んでしまふことが分つてゐたら、あなたとお別れするんぢやなかつたと、いまさら悲しんでゐます。お父さまのお言葉なんか聞くんぢやなかつたと悔んでも、もういたしかたがありません。すつとあの時から御一緒にゐたら、せめてあなたのお胸に抱かれて、愛されつゝ死ぬことが出來たでせうに。それにわたしは斯んなに早く死ぬやうなことはなかつたでせうに。でも、もういたしかたはありません。運命とあきらめるより他に致し方はありません。

二月五日。アルマンさま、どうぞお願いでございます。一時も早く歸つて來てくだ

さいませ。わたしは苦しくつて苦しくつて、いまにも死にさうでございます。

昨夜ぐらゐる悲しい苦しい夜はありませんでした。わたしは朝までねむらずにゐました。もういつそのことこの家を飛び出して、どこか人の氣づかない所へ行つて死んでしまはうかと思つたくらゐです。

今朝公爵がおいでになりました。死ぬといふことをお忘れになつてしまつたやうな公爵のお顔を見ますと、わたしは焦々して來て、いまにも死にさうな氣持ちがしました。

立ち上ると、ぐらくと倒れさうになるほどひどい發熱でしたが、わたしは無理から着物を着換へさせて貰ひました。わたしは最後に、いつぞやあなたと初めて一緒に行つたボオドヴィルの劇場へ行つて見たくなつたんです。わたしは苦みを忍びながら出かけて行きました。あの時に入つたボックスへジュリイと二人で入りました。あの時あなたがいらしつた座席を見て見ますと、田舎の青年みたいな方が一生懸命に見物してゐました。

劇場から家に歸つた時、わたしはもう息絶えになつてゐました。つゞけざまに胸が裂けさうに思はれるほど咳が出るのでした。遂々ひどい咯血をしました。

けふはもう口をきくことさへ出来なくなつてしまひました。やつとの想ひで、ほんの少し指先が動かせるくらゐです。わたしもう死んで行きますのよ。死はもう疾うに心に決めてゐたことではありますが、これ以上、もつとく苦しまなくてはならぬのかと思ふと、どうかしてこのまゝひと思ひに死んでしまひたいと希ふんです。アルマンさまわたし、それから……」

これから先數行は、殆んど讀むことが出来ないほど、文字が亂れてゐた。その後はジュリイの手に依つて代筆されてゐた。

二月二十八日。アルマンさま。マルグリットさまはお芝居へいらつした日から、どん／＼容態がお悪くなつて、其の後一層危険になるばかりで、もうお聲も出なければ、手足も動かせないといふ有様です。お苦しみになる御容子といつたら、見てゐるわたしが堪へられないくらゐです。わたしは御病人の看護をいたしますのは、初めて



でございますんで、たゞもう氣ばかりもんで居りました。

あなたさへこちらにいらしたたら、どんなにまあ嬉しいことでございます。わたしはそればかり思つて居ります。御病人は絶えず熱にうかされどほしで、わけのわからぬ囁語ばかりいつてゐらつしやいます。時々あなたのお名だけは不思議にもはつきりと、が、きれぐにお呼びになるんでございます。そのいたましさと言つたら、看<sup>み</sup>てるわたしが我慢してゐられなくつて、思はず涙にくれてしまふんでございます。

お醫者さまも、もう長くは持たないと匙をお投げになりました。お病人さまが、斯んなに激しくお苦しみになるやうになつてからは、よくお見舞においでになつた老公爵もおいでにならなくなつてしまひました。あまりお苦しみになる容子を、老公爵は見るに忍びないと、お醫者さまにおつしやられてゐたさうでございます。

ブルウダンスはほんとうに不人情な女でございます、マルグリットさまからさんざんお金を貰つて、ずるぶんいろ／＼なお世話になつてゐながら、また身分不相應な借金をしまして、それも拂つて貰はうとしてゐましたが、マルグリットさまにその資力

がなくなつてしまつたのを知ると、もうたゞの一度も見舞ひに來なくなりました。もうみんながみんなマルグリットさまをお見捨てになつてしまつたんでございます。

伯爵は借財にお困りになりました、ロンドンへお歸りになられました。お歸りになる時、伯爵はお立寄りくださつて、さうしたお境遇にありながらわたしたちへお金を置いて行つてくださいました。出来る限りのことをお盡しくだすつたのは、あの方だけでございます。

またいまでは財産差し押へをやられてゐるんです。わたしはどうかして差し押へだけはしないで貰はふと思ひまして、執達吏に話しますと、これから後に續々と差し押へるやうな借金があるから駄目だといふんです。もうどうせマルグリットさまは、おたすかりにならないんだから、いまのうち競賣してしまふやうに頼んで見ましたが、さぶくまゐりませんでした。

アルマンさま、あなたにマルグリットさまがどんなにいたましい瀕死のお苦しみをつゞけていらつしやるか、御想像はどうていできますまい。

昨日もわたしたちは無一文になつてしまひました。皿や小鉢の類まで質屋へ入れてしまつたんですから、どうにもやつていけやしません。

マルグリットさまはもうすつかり弱り果てゝいらつしやるのに、氣ばかりはやつぱり確かなんでございます。ですから家内の事情をよく知つていらつしやいます。おからだの苦しさよりは、この方の苦痛がもつとえらかつたと思ひます。すつかり頬肉の落ちてしまつた蒼い兩頬には、たえず涙が流れてゐます。黒々として美しかつた瞳は、どんよりと白味がかつて、辛うじて開かれてゐるやうな瞼の中に、落ちくほんでゐます。もしあなたがお會ひになつたら吃驚するほど、お變り果てゝしまひました。わたしはあんまりおいたはしくつて、じつとお顔を見るのも忍びません。

すつと以前から、マルグリットさまは若し自分が日記を認めることが出来なくなつたら、わたしに代筆するやう頼んでいらつしやいましたので、わたしはいつも、マルグリットさまのお目の前で書くことにいたしました。いまもこれを書いてゐますと、マルグリットさまはわたしの方をじつと見ていらつしやいます。視力はすつかり鈍つ

ておしまひになつて、わたしの姿さへほんやりしか見えない御容子です。ですがしきりに微笑を浮べていらつしやいます。マルグリットさまの靈は、きつとあなたのお傍へ飛んで行つてゐるんでございませう。わたしに確にさう思はれます。

お部屋の戸が開くたんびに、マルグットさまはあなたがお歸りになつたんではないかといふやうな表情をなすつて、大變お喜びになつて、無理に寝返りさへなさらうとするんでございます。わたしは周章てゝお止めをして、あなたではないと申しますと、急にがっかりなすつて、いひ表はすことの出来ない、悲しい表情をなさるんです。蒼ざめた額の上には冷汗が滲み出て居ります。

二月十九日夜半。アルマンさま——けふはなんと悲しい日でございます。わたしは生れて初めて、斯んな悲しい日に出會つたんでございます。

マルグリットさまは、けさになつて急に息が出来なくなりました。お醫者さまが血をお吐かしになりましたんで、やうやくお聲が出るやうになりました。お醫者さまは悲痛なお聲で最後が近寄つたことをマルグリットさまに宣告なさいました。そんな

に弱り果てゝゐて、お氣はたしかなんですから、全く不思議なくらゐるでございます。お医者さまの言葉にそつと點頭うなづいていらつしやいました。やがてお医者さまは坊さんをお招びになるやうにすゝめました。マルグリットさまもすぐ御同意なさいましたのでお医者さまは御自身で、サン・ロツシユの坊さんを迎ひにいらつしやいました。

それから、マルグリットさまはわたしを寢臺の近くへお招きになりました。枕下の戸棚を開けてくれるやうにと手眞似でおつしやいました。戸棚を開けると、そこにお帽子と、レエスの附いてゐる袴とを指さしておつしやいました。

『わたし懺悔をして死にますから、その帽子とお袴とを被せてくださいね。これがわたしの最後のお願ひです。』と、おつしやつてからわたしの手を確りとお握りになつて『話はしやうと思へばできるんです。でもねえ、話をすると思が詰まるんです。あゝ苦しくなつてきましたわ。窓を、窓を。』とおつしやつて苦しきうな息をおつきになりました。

わたしは泣きながら、おほいそぎで窓を開けました。

間もなく三人の坊さんと、十字架を持つてゐる歌唄ひとがやつてまゐりました。

わたしはすぐお出迎ひをしました。が坊さまたちは、この家がどんな種類の家であるといふことを御存知だと見えまして、暫らく室内へ入るのを躊躇ちゆうちゆうなされてゐるやうでした。

『御神父さま、どうぞ遠慮なしにお入り下さいませ。』と、わたくしが申しますと、御親父さまは病室へ入つてゐらつしやいました。

やがて十字架を持つた歌唄ひが靜かに歌を唄ひ始めました。死んで行く者のために清い儀式を知らすために、坊さまは清い鉦をお鳴らしになりました。

わたしは思はず跪ひざまづいてお祈りを始めました。この時の嚴な、が哀しい氣持ちは、死ぬまで忘れることは出来ません。

坊さんはマルグリットさまの手足や額に油をおつけになつて、臨終の儀式をなさいました。マルグリットさまは、必ず天國へいらつしやるに違ひはありません。これまでものお苦しみに、臨終のお清さとは、神さまがちやんとごらんになつてゐるに相違あ

りませんから。

マルグリットさまはそれつきり身動きもしなければ、無言のまゝでゐらつしやいますので、もうなくなられたのかと思つて、お傍へ寄つて見ますと、苦しうな息づきを聞きました、思はず胸をさすりました。

「あの方の御生涯は罪人としての御生涯でした。しかし立派なキリスト教徒として天国へ行かれます。」

坊さんはお歸りになる時、かうおつしやつて十字をおきりになりました。

二月二十二日。悲しい最後はまゐりました。今日の午後二時、マルグリットさまはおなくなりになりました。息をおひきとりになられる時のお聲の悲しかつたといつたら、それは申し上げることは出来ません。昔から宗旨の争ひから残酷な御處刑になられた坊さんたちでも、あれほど悲しいお聲はおだしにならなかつたであります。いかにも生きてゐいといふやうな御容子で、二度も三度も寝臺の上に取り上らうとなさいました。

二三度つゞけてあなたのお名をお呼びになりましたが、それつきりおつしやれなくなつて、力ぬけのしたやうに寝臺の上にお倒れになつてしまひました。涙をお流しになつて、それつきり息を引きとつてしまひました。

わしはお耳近く口を寄せて、マルグリットさまと二三度繰り返して呼んで見ましたが、亡くなられた方の口からお答へがあらう筈はありません。わたしはそつとお眼をお閉ぢしまして、額にキスをいたしました。

おいたはしいマルグリットさま、せめてわたしが聖い女でありましたなら、わたしの接吻で、神さまのお前におすゝめすることが出来ましたでせうに。

御生前にお頼みを受けたやうに、わたしはマルグリットさまに清いお召物を着せ申しました。それからわたくしは寺院へ参りまして、お蠟をあけ、一時間ばかりお祈りをして歸つてまゐりました。

わたしはマルグリットさまの御冥福のためと思ひまして、貧しい者たちに施しをしてやりました。わたしには宗教がどんなものであるかといふやうなことは分りません